

# 人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

今村賢司

## 一 はじめに

当館では平成一三年度秋、文化庁との共催で「日本のわざと美」展―重要無形文化財とそれを支える人々―を開催した。この展覧会は、日本の伝統工芸（陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・手漉和紙・截金・撥鏤の各部門）の最高の「わざ」を、歴代の重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）・保持団体の代表的作品とともに、それらの工芸技術の表現に欠くことのできない用具や材料の製作・生産等の技術の關係資料で総合的に紹介するものであった。<sup>1)</sup>

愛媛県においては、工芸分野で人間国宝が一人誕生している。昭和三〇（一九五五）年、金工の部門で重要無形文化財「日本刀」の保持者として初めて認定された高橋貞次（たかはし 貞次）である。彼の作刀技術は、山城、大和、備前、相州、美濃の各伝法<sup>2)</sup>に通じ、その作品は優美と洗練された味に特徴がある。とくに備前伝、相州伝に優れた作品を残している。<sup>3)</sup>

筆者は展覧会の開催に先立ち、高橋貞次の御子息にあたる高橋貞喜氏夫妻にお会いする機会を得た。その際に貞次の作刀の仕事場であった鍛

錬場が現存している事実を知り、御夫妻の御協力により鍛錬場を調査できることとなった。場内には貞次自身が使用した鍛冶道具類、日本刀の原料、刀剣研究の参考にしたと思われる典籍類などが、御遺族によって大切に保管されていた。これらは刀匠で人間国宝の高橋貞次の優れた作品を陰で支えていた資料であるとともに、彼の作刀活動の一端を知り得る貴重な資料である。幸いに、鍛錬場に残る資料の一部が平成一三年度に当館に寄託されることとなった。そこで、本稿では、これまで紹介されることになりなかつた高橋貞次の鍛錬場の資料について、当館寄託資料を中心に紹介したい。

## 二 高橋貞次と鍛錬場

まず最初に、刀匠高橋貞次の生涯についてふれておきたい。彼の履歴については、すでに先学諸氏によって紹介されている。<sup>4)</sup> それらの先行文献をもとに高橋貞次の年譜を表1にまとめた。

それによると、高橋貞次は、明治三五（一九〇二）年四月一四日、愛媛県新居郡西条大町村<sup>5)</sup>の青果商を営む高橋喜平の第七子として生まれ、金市と名付けられた。貞次は昭和四三（一九六八）年に病没するまでの

表1 高橋貞次の年譜

和 暦	西 暦	月 日	おもな出来事	場 所	年 齢	備 考
明治35年	1902	4. 14	愛媛県西条の大町村の柿屋・高橋喜平の七人目の末子として生まれる。本名金市。	愛媛県西条	0	
大正2年	1913	3. 1	母病死。		11	
		3. 13	兄の徳太郎(16歳)が家出し、岡山の備前長船の祐定入門する。		11	
大正7年	1918		帝室技芸員の月山貞一・貞勝父子に入門。	大阪	16	入門を大正6年とする説あり。
大正8年	1919		中央刀剣会の養成工となる。	東京九段	17	
大正12年	1923		中央刀剣会の養成工を卒業する。		21	
			故郷西条に帰る。		21	
この間、郷里西条に帰り古刀の研究をする。				愛媛県西条		
昭和5年	1930		松山の千舟町に移り住む。	愛媛県松山	28	
昭和10年	1935		第一回新作刀展で総理大臣賞を受賞する。大日本刀匠協会の審査員となる。		33	
昭和11年	1936		松山市道後石手に鍛錬場を建てる。三笠宮家の御用命を拝し宮中御用刀匠となる。		34	鍛錬場設立を昭和12年10月とする説あり。
昭和13年	1938		第一回刀剣展で内閣総理大臣賞を受賞する。		36	第一次近衛文麿内閣。
昭和14年	1939		満州国皇室からの要請により、満州国産の地鉄で太刀を制作し日本の皇室に献上する。		37	本間順治博士の紹介で満州国皇帝に刀を献上する。下賜金で松山石手に鍛錬場を建設し、源龍王貞次と号したとする説あり。
		4	後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀奉納会の依頼により、貞次は水無瀬神宮、兄義宗は隠岐神社に刀を奉納する。		37	
昭和15年	1940	7	鎌倉八幡宮の神宝刀を謹作する。		38	
昭和16年	1941	4	全国の刀匠の中から選抜され、朝香宮殿下から水無瀬神宮へ御寄進の御神宝刀鍛造の奉仕をする。		39	
昭和18年	1943	8	宮内省より帝室技芸員の内定通知を受ける。		41	内定は昭和19年11月とする説あり。
昭和19年	1944		熱田神宮大鍛刀場の主任刀匠に決定するが、終戦をむかえる。		42	
昭和20年	1945	7. 26	松山空襲で千舟町の自宅が焼失する。		43	
		9	ポツダム宣言による鍛刀禁止令公布。		43	
昭和25年	1950		戦後の第一作として、在日米軍第八軍司令官ウォーカー中將に本間順治博士を通じて、梅龍の彫刻の短刀を贈呈し、感謝状が贈られる。		48	
		11. 25	延仁寺僧堂竹田益州師から「龍泉入道貞次」の号が贈られる。		48	
昭和26年	1951	4	第59回伊勢神宮御遷宮の御神宝八口磨研の御用命を受ける。		49	
昭和27年	1952	4. 1	文化財保護委員会の選定により、日本刀刀匠のうち唯一の無形文化財に指定される。		50	
		8	伊勢神宮の御用命が無事終了する。		50	
昭和28年	1953		作刀技術発表会で特賞を受ける。		51	
			伊勢神宮から奉納刀十三振りの鍛錬を依頼される。		51	
昭和29年	1954	3. 15	東京日本橋三越で開催された「第一回無形文化財総合展」に短刀「銘 一代精魂三作也」を出品する。高く評価され、「名刀図鑑」に載る。		52	
		12. 27	貞次の作品が第一席に選ばれる。		52	
昭和30年	1955	1. 15	戦後第一回の「新作美術刀剣展」が東京上野の東京都美術館で開催され(1月17日迄)、「小龍泉光」の写しを出品し、特選第一席を獲得する。		53	
		5. 12	重要無形文化財「日本刀」の保持者に認定され、人間国宝となる。		53	指定は3月16日。
昭和31年	1956	1	上野美術館で開催された第二回新作刀展でも特選第一席となる。		54	
昭和32年	1957		愛媛県主催で三越松山支店にて「重要無形文化財刀匠高橋貞次名刀展」を開催する。		55	29点を出品。
		春	東京の新作刀展に相州伝二尺四寸五分の彫なしの作品を出品する。		55	
昭和33年	1958	2	愛媛県の依頼で制作した相州伝脇差(梅竹の彫)が出来上がる。		56	相州貞宗、越前康継の作品を意識している。
		5. 21	愛媛県の依頼で制作した備前伝柄入りの「大包平」の写しが出来上がる。		56	
昭和34年	1959	3	国が依頼した備前伝が完成する。		57	
		5. 14	松山市道後の寿苑、宝荘で、日本美術刀剣保存協会の「第八回全国大会」が開催される。		57	
			皇太子殿下御成婚に際して妃殿下の御守刀を謹作する。		57	
昭和35年	1960		皇太子殿下の第一皇子浩宮の御誕生に際し御守刀を謹作する。		58	
昭和39年	1964	9. 1	大阪松坂屋で「人間国宝刀匠二人展」開催(9月13日迄)。		62	人間国宝・高橋貞次と宮入昭平の作品展。
昭和40年	1965		第二皇子礼宮の御誕生に際し御守刀を謹作する。		63	
昭和41年	1966	10. 25	東京上野の松坂屋で「現代名刀五人展」が開催される(10月30日迄)。		64	
昭和43年	1968		熱田神宮の神宝御紋康継を模作し奉納する。		66	
		8. 21	病気のため死去。		66	
昭和44年	1969	10. 26	愛媛県郷土芸術館で「故人間国宝 高橋貞次ゆかりの名刀展」開催(11月16日迄)。			

本表は、註(4)に掲げる先行文献を参考に作成した。

六六年の生涯は、彼の絶え間ない日本一の刀匠を目指して歩んできた作刀の道であった。貞次の生涯を次のような時期区分でとらえてみた。

第一期 郷里の西条での幼少時期（明治三五～大正五年頃）

五歳年上の兄・高橋義宗<sup>6</sup>の影響で、次第に刀剣に興味をもつ幼少時期。

第二期 大阪・東京での刀鍛冶の修行時期（大正七～大正一二年頃）

大阪の刀匠月山貞勝・貞一父子<sup>7</sup>に入門し、のちに東京で中央刀剣会の養成工として刀鍛冶を修練する時期。

第三期 西条での活動時期（大正一二年～昭和初期）

刀剣離れの世の中で新作注文がなく、一時期、郷里西条に帰り古刀の研究や彫刻のわざを磨いた時期。

第四期 松山における鍛錬場での活動時期（戦前）

戦争にともない刀剣の需要が増えるなか、道後石手に鍛錬場を開き、多くの作品を手がけた時期。この時期の作品は中央の作刀展等で受賞するなど、刀匠としての卓越した鍛造技術が全国的に響き渡る。

第五期 松山における鍛錬場での活動時期（戦後）

戦火で自宅が焼失、GHQによる鍛刀禁止令<sup>8</sup>など、敗戦にともない刀剣の需要がなくなるが、戦後の苦難を乗り越え、日本刀の復興のため尽力する時期<sup>9</sup>。

第六期 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定以降の活動時期

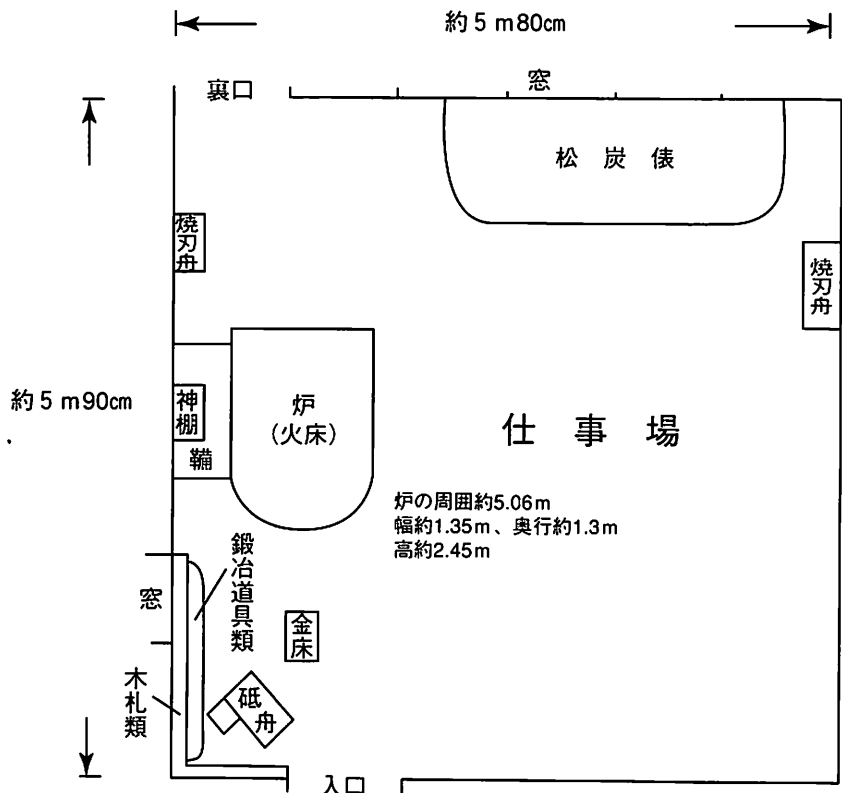
重要無形文化財「日本刀」の保持者として、全国で初めて認定され、名実ともに日本一の刀匠として活躍した時期。

ここで着目するのは、第四期～第六期を通じて高橋貞次の生涯の作刀活動を実践する場所として、その中心的な役割を占める鍛錬場である。

鍛錬場は、現在の松山市石手五丁目に所在し、道後湯築城と四国八ヶ所霊場五一番札所の石手寺を結ぶ街道沿いに位置する。道後周辺の都市開発が進むなか、旧地に往時の面影を漂わせている（写真①）。

鍛錬場は昭和一一（一九三六）年に建てられ、貞次が亡くなる昭和四三（一九六八）年までの戦前戦後を通じて約三二年間操業された。設立当初の頃の様子を写した絵葉書（写真②）によると、鳥居門横にかかる木札に「日本刀鍛錬場御刀匠龍王子貞次」とあり、正式名は「日本刀鍛錬場」であることがわかる<sup>10</sup>。鍛錬場では、鎌倉八幡宮（神奈川県）、水無瀬神宮（大阪府）、伊勢神宮式年遷宮（三重県）などの御神宝の太刀や、皇孫浩宮、皇孫礼宮御誕生の際の御守刀など、優れた数々の名刀が生まれた。表2は、貞次が鍛錬場で制作したおもな刀剣である。

鍛錬場は入母屋造の平屋で、仕事場、書斎兼作業部屋、居間からなる。屋根には、「龍泉」と号したことから、見事な龍の装飾瓦が葺かれている。現在の仕事場（写真③）には、注連縄をめぐらした炉（周囲約5m、高約二、四五m）、炉の側面に鞆（フイゴ）、その上部に神棚、炉の前に金床と水舟、金床近くの壁面に平箒、その上部の棚に守札、木札類が置かれ、奥の壁に焼刃舟を掲げ、入り口から最も奥まった所に松炭俵が山積みされていた（鍛錬場略図参照）。昭和四〇年代頃の作刀の様子を写した古写真（写真④）と比較すると、鍛冶装置や鍛冶道具が置かれていた場所はほとんど変わりがなく、貞次の仕事場は往時の姿をとどめていることがわかる。



鍛錬場略図(平成13年調査)

### 三 当館寄託・高橋貞次関係資料の概要

当館に寄託された高橋貞次関係資料は、鍛錬場で使用・保管されていたものである。それらは大別すると、Ⅰ鍛冶道具類とⅡ典籍・記録類からなる。鍛冶道具類には、①原料・材料、②製作道具、③半製品、④木札、⑤信仰関係が含まれる。一方、典籍・記録類には、①刀剣・刀工図

鑑類、②仏画・図案類、③刀剣雑誌、④拓図・スケッチ類、⑤帳簿、⑥古写真・絵葉書類、⑦出品目録類、⑧その他、からなる。以下、おもな資料の内容を紹介する。

#### I 鍛冶道具類

##### ①原料・材料

砂鉄、玉鋼、炭俵、焼刃土、砥石などがある。

砂鉄は、昭和四三年に刀剣愛好家から試用に贈られたものである。

砂鉄は刀の材料であり、鳥根県産のものが最上とされた。

玉鋼は保管されている木箱の箱書きに「極上出羽産」とあること

から、出雲地方で造られた出羽鋼であることがわかる(写真⑤)。

玉鋼とは、「たたら」と称する大きな炉によって生産された和鉄の

中の最も優れた鋼のことで、日本刀の材料である。一般には出雲産

の出羽鋼、千草鋼が日本刀の鍛錬に適しているといわれている。貞

次の場合、一振りりで約三〜五貫匁必要とした。

焼刃土は粘土、石粉、炭粉などを練り合わせた土である。これを

刀身に塗り、ヘラで刀紋を描き、乾燥後、焼くと刃文が焼き付けら

れる。この作業を「土取り」という。焼刃土の分量、調合物、調合

法は各流派、各刀匠の秘伝である。

炉の燃料に使用する松炭が入った炭俵がある。貞次の場合、一振

りの刀を鍛錬するには約五百俵必要とし、また、火力にムラがない

ように、松炭は節のないものだけを選び、約五センチの細かい炭片

を用いた。

砥石は、焼き入れが無事終わり、鍛冶砥ぎ(刀身に生じた曲りや

反りを修正した後、刀匠自らが行う研磨)に使用するものと、刀身

彫刻の研磨に使用する小片がある。

②製作道具

製作道具には、向槌（3点）、鞆（1点）、塗り台（1点）、焼刃船（2点）、平箸（12点）、テコ棒（7点）、焼柄（3点）、セン鋤（2点）、居床（1点）、鑢（47点）、彫刻用具（一式）、彫刻の型どり（36点）などがある。いずれも刀鍛冶としての必須道具であり、平箸、焼柄などの鉄の材質のものは自家製である。

向槌（写真⑥）は柄の長さが約八三センチある大槌である。玉鋼を火に入れて三日間、折っては伸ばす「折り返し鍛錬」を二〇回近く繰り返し、粘土と藁灰をつけて打ち上げる「素延べ」の工程などに使用された。この作業は師匠（横座）の指揮に従って三人の向槌が行った。向槌のうち一番重いものは三貫目（約一kg）で、これをふるうのは体力や修練が必要とされ非常に重労働であった。三人の向槌は貞次の鍛冶仲間<sup>(11)</sup>に依頼した。

鞆（写真⑦）は炉に風を送る道具で、長方形の箱型（「大極上四尺 四寸高 五分廣 特殊名」の墨書銘がある）を呈し、柄を抜き差しして手で風を送る「差し鞆」である。炉のすぐ横に備えつけられ、長年稼働していたため底部に痛みがあるが、内部は状態が良く、空気漏れを防ぐために風押板に狸の皮が張られている。刀の形にしていくな作業を「火造り」といい、その際の炉の火加減は名刀と鈍刀の分かれ目とされるため、鞆加減がとて難しいとされた。塗り台（写真⑧）は刀身に焼刃土を塗る時に使用する木製台である。大小二つあり、表面には焼刃土が付着している。

焼刃舟は、刀用と短刀用の大小二種類の水槽がある。この道具は「焼き入れ」の工程で使用する。刀身の元から先までを一定の熱で

焼き上げ、秘伝中の秘とされる湯が入った焼刃舟にかけ声とともに浸し、刀に生命を入れる。

平箸（写真⑨）は刀身を支えたり炉へ入れたり出したりする時に用い、さまざまな形をしている。テコ棒（写真⑩）は炉で鋼を沸かし、金床の上で鍛錬する時、その鋼をささえる棒のことである。柄部分に縄が巻かれている。焼柄は焼き入れする時に刀身の茎に差し込む長い柄で、柄部分に布が巻かれている。また、セン鋤（写真⑪）は、刀の形に造り上げる「火造り」の工程の後で、無駄な部分を削るための道具である。居床（写真⑫）は、セン鋤をかける時などに刀身の下に敷く台で、底部に「大正十二年三月吉日龍子貞次」の墨書銘があり、製作道具の中で紀年銘をもつ貴重な資料である。この年は貞次が東京九段の中央刀剣会の養成工の卒業にあたる。鑢は、茎などの仕上げに用い、さまざまな種類がある。茎には鑢目があり、それは流派や刀工独自のものである。資料の中には、茎「於松山オースチンケイス作之」（1点）がある<sup>(12)</sup>。

彫刻用具（一式）（写真⑬）は、ルーペ、砥石、銘切り台、小槌、小鑿などがある。刀身彫刻の型どり（36点）は、鉛製で、大黒、不動明王、寿亀、蓮華、梅、梵字、人物、波、龍、梅龍、劍卷龍などの彫刻模様（写真⑭）がある<sup>(13)</sup>。また、石膏製の劍卷龍の彫刻の型どりもある。これらは貞次が得意とした刀剣彫刻の出来上がった作品の記録用にとられたものと考えられる。

③半製品

制作途中段階のもので、刀や短刀等の素延べ品（写真⑮）が二三点ある。素延べとは、皮がね（硬い鋼）と心がね（庖丁鉄と呼ばれる軟らかい鉄）とを組み合わせたものを熱を加えて打ち伸ばしたも

のである。その多くは造り上げた際の状態などがわかるように書かれた小札が付されている。また、火造りを終えた刀身(1点)がある。

#### ④木札

木札には刀剣展での受賞にもなう祝い札(1点)と、皇族や古社からの御下命による作刀の謹作中の札(3点)がある(写真⑯)。「祝日本刀展御入選 愛媛刀剣会有志 首相賞獲得」と書かれた木札は、昭和一〇(一九三五)年に第一回新作刀展で総理大臣賞を受賞した時(三三歳)のもので、貞次の最初の栄誉であった。

木札「三笠宮家御下命御護刀謹作中 龍王子源貞次」は、昭和一(一九三六)年に宮中御用刀匠として三笠宮家の御下命で御護刀を制作した時(三四歳)のものである。木札「大塔宮鎌倉八幡宮御寶刀謹作中 昭和十五年七月吉日龍王子源貞次」は、昭和一五(一九四〇)年に鎌倉八幡宮(神奈川県)の御神宝刀を制作した時(三八歳)のものである。木札「陸軍省御下命 朝香大将宮殿下御太刀謹作中」は、昭和一六(一九四一)年、官幣大社水無瀬神宮の第一回全国刀匠選抜奉仕が行われ、全国の刀匠の中から高橋貞次が選抜され、朝香宮殿下から水無瀬神宮へ御寄進の御神宝刀の鍛造の奉仕をした時(三九歳)のものである。

#### ⑤信仰関係

小祠(1点)と守札(6点)がある。これらは仕事場入り口付近の神棚に祀られていた。「鍛冶御祖神祭御護」や「稲荷神社開運御守」の神符や、愛媛県内の伊佐爾波神社(松山市)、大山祇神社(大三島町)、県外では金毘羅大権現(香川県)、多賀大社(滋賀県)、成田山新勝寺(千葉県)などの神符がある。また、水無瀬神宮の除魔之劍

(竹製)もある。貞次は刀を打つ時には齋戒沐浴し、衣をあらためて刀の神様の天目一箇命(アメノマヒトツノカミ)、さらには成田不動明王に一心不乱の祈りをささげて心を落ち着かせた。

## II 典籍・記録類

### ①刀剣・刀工図鑑類

江戸期のものに『新刀銘盡』五冊、『古刀銘盡大全』九冊、『新刀辨疑』一冊などがある。『新刀銘盡』は六巻六冊、神田勝久編、内題に「新刀銘鑑」とあり、諸国の新刀の押型と刀匠を紹介したもので、享保一四(一七二九)年に京都で刊行された。巻一が欠本。『古刀銘盡大全』は九巻九冊、仰木伊織著、寛政四(一七九二)年に江戸で刊行された刀剣書で、用語、刃文などの基礎知識、刀工系図、古代名剣、中心銘押型などが絵入りで紹介されている(写真⑰)。本書は幕末から明治にかけて最も利用された刀剣書である。『新刀辨疑』は九巻九冊、別名『慶長以来新刀辨疑』、鎌田魚妙著、安永六(一七七七)年に刊行された。本書は新刀書の最高峰として有名で、新刀の巧拙によって位列を付したものが、残念ながら巻之五「畿内 東海道」のみである。

近代以降の刀剣・刀工図鑑類としては、『新刀名作集』(昭和三年刊)、『縮刷刀工総覧』(昭和三年刊)、『大日本刀剣商工名鑑』(昭和七年刊)、『古今金工全集』(昭和三一年刊)、『第二回重要刀剣等図譜』(昭和三四年刊)、『日光の名刀』(昭和三七年刊)、『熱田神宮宝物』(昭和四一年刊)などがある。これらの刀剣・刀工図鑑類は、貞次の日本刀、とくに古刀・新刀への関心を示す資料として興味深い。

### ②仏画・図案類

『種類集』は寛文七（一六六七）年に刊行された仏教書で、仏教における諸仏や梵字が紹介されている。奥書に「大正十年九月吉日 求之 龍子貞次蔵書」と墨書銘があり、貞次が中央養成工時代に買い求めたものと考えられる。また、表紙に「佛画 龍子貞次蔵」と書かれた板本が二冊（巻之二・巻之三）ある。題箋や内題がなく、書名は不詳だが、諸仏が絵入りで紹介されている（写真⑱）。

前述のとおり、高橋貞次は作刀とともに刀剣彫刻にも優れた作品を残している。とくに龍の彫物は有名である。貞次が大切にしていた本に、中住道雲著の明治四三（一九一〇）年に刊行された一冊の絵本（書名不詳）がある。自然風物や動植物などの伝統的な図案が紹介されており、細工龍の図も掲載されている（写真⑲）。これらの仏画・図案は、前述の彫刻の型どりとともに、刀身彫刻の図案の参考資料として用いられたものと考えられる。また、仏教が刀剣や刀鍛冶と密接不可分の関係にあったことを示している。

### ③ 刀剣雑誌

「刀剣美術」、「刀剣と歴史」、「趣味のかたな」、「春霞刀苑」、「刀剣趣味」などがある。とくに「刀剣美術」は日本美術刀剣保存協会<sup>18</sup>の機関誌として月刊され、昭和二八年から貞次没年の昭和四三年までのものがまとまっている。本雑誌には、日本美術刀剣保存協会が開催する作刀技術発表会の入選者氏名と作品名が掲載され、貞次は幾度か紹介されている<sup>19</sup>。また、昭和三三（一九五八）年、第四回作刀展の授賞式での本間順治審査員と貞次刀匠の作刀技術に関する問答の録音記録<sup>20</sup>が掲載されており、貞次の作刀への考え方や刀剣界における活躍ぶりを窺い知ることができる。

### ④ 拓図・スケッチ類

拓図は三種類ある。熱田神宮（愛知県）宝物の脇差（1点）（写真⑳）を写したものと、昭和三二年の自作の短刀（1点）<sup>21</sup>、龍の彫物（2点）<sup>22</sup>がある。なかでも熱田神宮の脇差の拓図は、初代越前康継作の名刀で、その表裏と中心棟、棟筋を写し、細部の法量や地鉄について観察したデータが詳細に記載されている。

長サ一尺一寸七分 元中一寸三分二フ 元重二分二フ 先中一寸二分八フ 先重二分 切先ヨリ五分六フ下ツタ所 中心長サ四寸五分 中心区下中一寸七フ 全先巾六分 地鉄小板 目詰り鉋付ク

墨書から貞次が昭和三六（一九六一）年一月に写したものであることがわかる<sup>23</sup>。貞次は昭和四三年にこの脇差の模作を熱田神宮に奉納している。

スケッチは、一枚の薄紙に「庖刀正宗」<sup>24</sup>などの姿が描かれ、法量や指示が記されている（写真㉑）。庖刀正宗は二つ描かれており、一つは日向延岡の内藤家伝来の庖刀正宗（中央図）、もう一つは武州忍の松平家伝来の庖刀正宗（左図）である。貞次は前者を昭和三七年、後者を昭和四二年に制作している。

これらの資料は、古刀や新刀の名物のわざに挑んだ貞次の刀匠としての意気込みを示す資料として興味深い。

### ⑤ 帳簿

表紙に「昭和四年四月起 古書画交換 古道具刀剣古武器類売買 台帳 紙数□□」と墨書のある帳簿が一冊ある（写真㉒）。裏表紙には「松山市千船町四七番地 刀剣考古堂 匠名高橋貞次 本名金市」とある。内容は昭和四年から昭和一九年までの古道具刀剣古武器類の仕入れ支出の記録台帳である。買受譲受年月日、種類、品質、

員数、代貨、買主譲主の住所氏名、売渡譲渡年月日などが記載されている。また、昭和一八・一九年度の作刀要覧、刀剣の修理や彫刻の加工賃なども記されており、鍛錬場設立以前の貞次の活動や、戦前の鍛錬場の作刀活動(第四期)の実態がわかる貴重な資料である。

また、仕事場の隣部屋に掛けられていた黒板(四〇×九四cm)には、貞次自筆のメモがチョークで記されている(写真⑳)。メモの内容は、刀剣の制作注文や納入期限、譲渡などに関する事項で、昭和四〇(一九六五)年頃のものと思われる。

#### ⑥古写真・絵葉書類

古写真には、「高橋貞次肖像(烏帽子直垂姿)」(写真㉑)、「昭和一六年官幣大社水無瀬神宮第一回全国刀匠選抜奉仕の様子」(写真㉒)、「恩師月山貞勝先生肖像」、「第十三回愛媛新聞賞贈呈式記念写真」などがある。いずれも大切な写真であったため、額装され仕事場隣の居間に掲げられていた。

絵葉書は前述した一枚で、往時の鍛錬場の外観とともに烏帽子直垂姿の高橋貞次の肖像があるモノクロ写真である。タイトルに「鍛錬場(松山市道後石手表山麓)事務所(松山市千船町)高橋龍王子源貞次」と記載されている。貞次の名声によって鍛錬場が松山の名所として絵葉書になっている。

#### ⑦出品目録類

自作の刀剣を出品した際の展覧会目録(写真㉓)やその案内状がある。なかでも昭和三二(一九五七)年、愛媛県・愛媛県教育委員会・重要無形文化財高橋貞次技術保存対策委員会の主催で三越松山支店で開催した「重要無形文化財刀匠高橋貞次名刀展」の目録は、高橋貞次の愛媛県における最初の大規模な展覧会であり、「高橋貞

次刀匠の部」で二九点の作品を出品している。また、昭和三二年、日本刀同好研究会主催で東京で開催された「新作刀展示会目録」の裏表紙に観覧の際の感想と思われる自筆メモがあり、貞次の名刀へのこだわりや、刀剣鑑賞法、刀剣展示論などを読み取ることができる。

#### ⑧その他

貞次を紹介する一般書籍類、人間国宝の認定関係書類、日本工芸会関係書類、感謝状、松山銘菓「龍泉」の由来書き、名所絵、尺八教則本などがある。

以上、当館へ寄託された高橋貞次関係資料の概要を述べた。寄託資料の全容については、巻末の資料一覧を参照されたい。

なお、管見の限りでは、愛媛県内で高橋貞次関係資料を収蔵する機関は、当館以外に愛媛県生涯学習センター、愛媛県美術館、松山城などがある。

## 四 おわりに

本稿では、高橋貞次の鍛錬場の資料について、当館の寄託資料を中心に紹介した。あらためて、これらの資料は、刀匠で人間国宝の高橋貞次の卓越したわざの基盤をなしていた根源であり、貞次の生涯の作刀活動を実践する場所として、その中心的な役割を占めた鍛錬場における活動の一端を知り得る貴重な資料であるといえる。

晩年、人間国宝・高橋貞次の名声が全国に遍く知られ、鍛錬場は松山の観光名所として人々の注目をあびた。だが、貞次没後は後継者がなく、やがて鍛錬場は閉鎖された。こんにち、高橋貞次や鍛錬場についてあま



り知られておらず、また、往時を知る人も少なくなりつつある。折しも今年、高橋貞次生誕一〇〇年にあたる。このような時期に、筆者が貞次の足跡をたどることができたのは望外の喜びである。本稿が人間国宝・刀匠高橋貞次の足跡とその仕事場であった鍛錬場を再認識するきっかけとなれば幸いである。

付記 本稿の作成にあたって、高橋貞喜氏夫妻には、再三、鍛錬場を御案内いただくなど、多大なご協力、ご教示を賜りました。また、以下に記す方々にもご協力・ご教示をいただいた。(敬称略・五十音順)  
梶岡秀一 佐々木正直 住田勉 仙波秀一  
末筆ながらここに記して御礼申し上げます。

註

- (1) 会期は平成一三年一〇月二〇日～十一月一八日までの三〇日間。観覧者総数七二四人。因みに、工芸分野の人間国宝の総数は、平成一三年度現在までに一三六人が認定されている。また、都道府県別に見ると、伝統工芸の盛んな東京都、石川県、岐阜県、三重県、京都府、岡山県、佐賀県、沖縄県などに人間国宝が比較的多く誕生している。
- (2) 日本刀の全国五ヶ所の主要産地のことで、五カ伝という。大和伝は大和国(奈良)で起り、歴史は五カ伝中最古。山城伝は山城国(京都)で起り、最も優雅な姿をもつ。備前伝は備前国(岡山)で起り、鎌倉期に作風を確立。美濃伝は美濃国(岐阜)で起り、大量生産の実用刀を戦国大名に供給。相州伝は相模国(神奈川県)で起り、鎌倉武士団に供給。
- (3) 平成一三年度「日本のわざと美」展では、高橋貞次が昭和三四年に制作した

太刀「銘 昭和卅二年二月吉日龍泉貞次造(花押) 斯道三十有八年 漸悟倫伝之奥義 不関毀譽耐苦難 遺精魂於後世矣」、刀「銘 日本重要無形文化財 龍泉入道貞次五十六歳造(花押)」を展示した。

- (4) 「人間文化財(4)少年時代の夢実る 刀匠高橋貞次氏」(週刊読売)九月二六日号、一九五四年。「日本刀を鍛える 高橋貞次氏」(週刊時事)一月二二日号、時事通信社、一九五九年。客野生「刀に生きる―人間国宝高橋刀匠物語―」(「かがりび」八三、愛媛県警察、一九六一年)。野口光敏「人間国宝・龍泉高橋貞次」(「人間国宝シリーズ31 高橋貞次・小野光敏・本阿弥日洲」、講談社、一九八二年)。「愛媛県史 人物」一九八九年。「人間国宝事典 工芸技術編」、芸艸堂、一九九六年など。本稿の内容はこれら先行文献によるところが大きい。
- (5) 現在の西条市大町。西条平野中央部、加茂川北岸に位置する。
- (6) 本名徳太郎。明治三〇(一八九七)～昭和二二(一九四六)年。一六歳の時に家出し、刀鍛冶を目指し備前長船の横山祐定に入門、のちに大阪の延寿太郎国俊に学ぶ。その後、関西屈指の刀剣商に転身する。なお、高橋義宗・貞次の墓は、西条市福武の金剛院にある(福永醉剣「刀工遺跡めぐり三三〇選」、雄山閣、一九九四年)。

- (7) 大阪の刀匠。奥州(山形県出羽三山)の月山鍛冶の流れを汲む。月山物は綾杉肌の地肌と刀身彫刻に特徴がある。貞一は昭和四六年に重要無形文化財「日本刀」の保持者(人間国宝)に認定される。松山城天守閣には、貞次の最晩年の作の刀「銘 重要無形文化財 龍泉高橋貞次彫同作(花押) 最晩年作也 昭和四十六年十一月吉日 月山源貞一切銘(花押)」が展示されている。これは、焼入れして彫刻もでき、研ぎあがったところで貞次が他界したため、貞一が銘を切ったものである。

- (8) ポツダム宣言に基づく勅令によって「武器等製造禁止令」が發布され、武器

と名付ける物一切の製造が禁止された。昭和二八年にこの法令は改定され、刀剣は文化財保護委員会の製作承認を得れば鍛刀してもよいこととなった。

(9) この時期、貞次は在日米軍第八軍司令官ウォーカー中将に本間順治博士を通じて、梅龍の彫刻の短刀を贈呈し、感謝状をもらった話がある。刀剣が武器でなく美術品であることが米軍に理解され始めたことを示す事例といえる。

本間順治(一九〇四―一九九一年)は、山形県鶴岡市生まれ。日本刀研究者の大家。号は蕉山。国立博物館(現東京国立博物館)調査課長、文化財保護委員会(現文化庁)美術工芸品課長を歴任する。この間、日本美術刀剣保存協会を設立、戦後の日本美術刀剣としての地位向上に寄与するとともに、高橋貞次の良き理解者だった。

(10) 名称を「鍛刀場」とするものもある。「人間国宝事典 工芸技術編」、芸艸堂、一九九六年。文化庁文化財部伝統文化課編「日本のわざと美」展―重要無形文化財とそれを支える人々―、二〇〇一年など。

(11) 佐藤寒山「日本刀の出来るまで」(本間順治監修・佐藤寒山著「日本名刀図鑑」、人物往来社、一九六三年)。鈴木卓夫「作刀の伝統技法」、理工学社、一九九四年。註(4)前掲書。以下、第三節の鍛冶道具類の使い方や工程の記述は、これらの文献を参考とした。

(12) 高橋貞次のもとで一時期、刀鍛冶を修行した外国人刀匠のキース・エルドリッチ・オースチン氏の昭和三八年の作。彼はアメリカのミネソタ州生まれ。貞次は内弟子をとらなかつたが、国立東京博物館刀剣室長・佐藤貫一の紹介で通いの弟子をとった。貞次はオースチン氏の銘を「はじめから形になっている」と誉めていた(「青い目の刀鍛冶」『月刊朝日ソノラマ9月号』、一九六三年刊。なお、ソノシートに音声が収められている)。

(13) 刀身に施した彫刻は文字と絵画に大別される。文字には梵字(とくに不動明王の種子が圧倒的に多い)、神仏名(八幡大菩薩が多い)、称名などがあり、

絵画には仏具、俱利迦羅(剣に龍の巻きついた図で、不動明王を意味する)、尊像、人物、動植物などがある(福永酔剣「日本刀鑑定必携」、雄山閣、一九九三年)。

(14) 第一次近衛文麿内閣当時。

(15) 当時の古写真が資料の中に含まれている。第三節のⅡ⑥古写真・絵葉書類参照。

(16) 稲荷明神は、天上より垂迹の際に轡を携えてきたという神話や、小鍛冶宗近が稲荷山から焼刃土を採って名刀を焼いたので、刀鍛冶は稲荷明神を祀るようになったといわれている。天目一箇神は、「古語拾遺」に天照大神が天岩戸に隠れた時、「天ノ目一箇ノ神ヲシテ、雑ノ刀、斧及び鉄鐸ヲ作ラシ」めたとあり、神話では天目一箇神が刀鍛冶の祖として登場する。福永酔剣「刀鍛冶の生活」、雄山閣、一九九五年。

(17) 福永酔剣「日本刀大百科事典」、雄山閣、一九九三年。刀剣書に関する記述はこれを参考とした。なお「古刀銘盡大全」の巻九裏表紙には、「昭和六年六月名古屋金正堂ニテ求之(出所大垣市)」と墨書があり、これが貞次のものならば、中央刀剣会の養成工を卒業し、昭和一一(一九三六)年に松山に鍛錬場を設立するまでの間に購入したものと思われる。

(18) 現在の財団法人日本美術刀剣保存協会。美術工芸品として価値のある刀剣類の保存及び公開、日本刀の鍛錬、研磨、刀装製作技術等の保存向上に寄与することを目的に昭和二三年に設立された。初代会長に本間順治が就任した。

(19) 管見の限りでは、「刀剣美術」第37、44、56、63、81、88、89巻に紹介されている。

(20) 「刀剣美術」第51号、昭和三三(一九五八)年刊、財団法人日本美術刀剣保存協会発行。ここで貞次は、名刀の模作の大切さ、理想的な刀の姿、備前伝丁字焼の秘伝、彫物の意義などについて説明している。とくに、彫物については、本間が「彫る時間があればもっと刀を鍛える方がよい」とする見方に対して、貞次は「彫刻のできない人は名刀は打てない」と反論し、彫刻に対

する評価がないことに嘆いている。

(21) 銘「昭和卅二年一月吉日 龍泉高橋貞次謹作」。護摩箸と松竹梅の彫物。

(22) 昇り龍と降り龍の拓図。

(23) これら三種類の拓図は、資料整理中に図録「熱田神宮宝物」(昭和四一年刊)の図版(初代越前康継作の脇差)の頁に挿んであった。貞次は昭和一九年、熱田神宮大鍛刀場の主任刀匠になるが終戦をむかえる。

(24) 鎌倉末期から南北朝初期に活躍した刀匠・相州五郎入道正宗の短刀。正宗の作風は鍛えの肌目を顕著にし、地沸がつき、地景の入った地鉄となり、大乱刃の刃文に沸がよくつき、金筋・砂流が激しいものとなり、刃文の中で抽象的な激しさを表している(「特別展日本のかたな―鉄のわざと武のこころ―」東京国立博物館 一九九七年)。

(25) 一、古名刀は其線美しく気高い(手挽の精錬されて居る事には驚く)

一、中心摺出し鋸下ヨリ

一、キド摺り面取り目釘穴大きく中心尻の事

一、始終名刀に親む事 押形を自分の部屋一面にならべる

一、城へきが三ツあるとする

◎(刀の姿の生命は関の上下五寸で定ると申して過言でないと思います)

一、本当の美人はラ体にせねば判ないの同様に此の陳列の御刀も鋸を取ってカザレバ一増に其の姿が判然とする

一、焼刃も姿も何云かと思へる様にそれには第一鑑識眼を養ふ事が先決

(26) 註(4) 前掲書の他に、「日本カメラ9月号」(一九五六年刊)、「鉄と生活 岩波写真文庫218」(一九五七年刊)、「月刊朝日ソノラマ9月号」(一九六三年刊)などがある。

(27) 人間国宝の認定関係書類は、高橋貞次が昭和三〇年五月一二日に重要無形文化財保持者として認定された時の官報(第八五〇五号)、第二次重要無形文

化財保持者認定書交付式実施要項、保持者認定一覧、連絡会の会則案、高橋

貞次技術保存対策委員会名簿などがある。

(28) 日本工芸会関係書類には、発会式の案内、入会依頼、正会員認定基準、定款・事業内容、会報、役員名簿、会員名簿などがある。

(29) 感謝状は、昭和三五(一九六〇)年、愛媛県郷土芸術館(現在の萬翠荘、前身は松平家別邸)に短刀「銘 梵字」を出品した折の愛媛県知事久松定武からの感謝状である。

(30) 松山銘菓「龍泉」は、松山の老舗菓子屋柳桜堂が、皇孫浩宮徳仁親王の御誕生で、貞次が守り刀「龍泉」を献上したことに困って作った焼菓子(現在は無い)である。伊予節を替え歌にした「伊予節小鍛冶」という唄もつくられた。作詞本間薫山(順治)、佐藤寒山合作。歌詞は「伊予の松山 道後の里に 龍泉貞次打つ槌の 音はテンカントテンカン 大地に響く文化財 神代の技をそのままに 今に伝える鍛冶人 切れは切れてもうるわしや 恋や情はよう切らぬ チョイト良い刀」。

佐藤寒山は、本名貫一。明治四〇年、山形県鶴岡市生まれ。日本刀研究者。

東京国立博物館調査課、刀剣室長を歴任する。本間順治とともに「日本名刀図鑑」(昭和三八年刊)などを手がける。

(31) 「東京日光鎌倉ノ景」(明治二二年刊)などがある。

(32) 「志羅遍之友」は尺八俗曲集で、貞次は尺八を趣味としていた。

(33) 愛媛県生涯学習センター収蔵資料は、刀剣銘の拓本、装束、烏帽子、彫金道具、御賜杯、重要無形文化財認定書、特別助成金交付書などがある。愛媛県美術館収蔵資料は、旧愛媛県郷土芸術館から移管されたもので、備前伝刀、相州伝脇差の二点ある(愛媛県生涯学習センターに展示)。松山城収蔵資料は、太刀(昭和三八年制作)、刀(昭和四六年制作)、短刀(昭和三一年制作)、彫刻台と彫刻途中の刀などがある。

表2 貞次が鍛錬場で制作したおもな刀剣

作品	銘	彫物	長さ	制作年	所蔵	備考
刀	於豫州松山龍泉王子貞次 昭和十一年八月 日		二尺三寸四分	昭和11年 8月	個人	
刀	梵字 神州正氣 源貞次 (花押) 梵字 鎮護国家 昭和十三戊寅年二月 日		二尺二寸六分	昭和13年 2月	個人	
短刀	彫同作龍王子源貞次 (花押) 劍友為木村君 昭和十三年二月 日		八寸	昭和13年 2月	個人	
刀	昭和十四年三月大吉日 常眞譚作 (花押) 影打 神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作 刀奉納会		二尺三寸七分	昭和14年 3月	個人	
刀	余光鉄精鍛龍王子源貞次 (花押) 昭和十七年八月吉日 彫物同作	表に昇り龍、裏に降り龍の彫物	二尺二寸八分	昭和17年 8月	個人	
刀	精鍛龍王子源貞次 (花押) 昭和二十年二月吉祥日		二尺二寸七分	昭和20年 2月	個人	
刀	精鍛龍王子源貞次 (花押) 昭和二十年二月吉日 彫同作	表に玉取り龍、裏に松竹梅の彫物	二尺一寸一分	昭和20年 2月	個人	
刀	昭和辛卯年卯月津刃龍泉入道源貞次彫同作 (花押) 大神宮以宝剣劍余光鉄父岩瀬忠雄為嫡子正臣作之	表に劍吞龍、裏に松竹梅の彫物	二尺一寸	昭和26年 4月	個人	
短刀	昭和辛卯年菊月津刃龍泉入道貞次彫同作 (花押) 大神宮以国宝劍劍余光鉄父岩瀬忠雄為嫡女湊子作之	表に梅龍、裏に松竹の彫物	八寸二分	昭和26年 9月	個人	
短刀	伊勢神宮御料刀余鉄 龍泉入道貞次作 (花押) 為同郷山内大年先生 昭和壬辰歲正月吉日		七寸五分五厘	昭和27年 1月	個人	
短刀	天照皇太神八幡大菩薩春日大明神 彫物同作 昭和癸巳歲正月 日 龍貞次精鍛之 (花押)	表に鶴亀松竹の浮彫り、裏に梵字、素劍連台の彫物	九寸七分	昭和28年 1月	個人	
短刀	八幡大菩薩 天照皇太神宮 春日大明神 彫物同作龍泉貞次精鍛之 (花押) 昭和癸巳歲正月 日		九寸	昭和28年 1月	個人	
刀	精鍛龍王子源貞次 (花押) 応佐々木直需作之 昭和甲午歲二月吉日		二尺一寸	昭和29年 2月	個人	
太刀	備前国長船住景光 元亨二年五月 日 甲午歲八月依膳博四郎需貞次精魂三作也		二尺四寸四分五厘	昭和29年 8月	個人	
短刀	切物同作干時五十二歲 龍貞次 (花押) 昭和甲午歲正月吉日一代精魂三作也	表額内に滝不動、裏に梵字に護摩箸爪の彫物	八寸七分	昭和29年 1月	個人	藤代名刀図鑑に掲載。第一回無形文化財総合展に出品。
刀	彫物一竿子手法 龍王子源貞次 (花押) 昭和三十年正月吉日 彫同作	表に劍卷龍、裏に梅竹の彫物	二尺三寸六分	昭和30年 1月	個人	一竿子忠綱の彫を模す。
刀	精鍛龍王子源貞次彫同作干時五十二才 (花押) 昭和三十年二月吉日 及心処不可有此上者也	表に草体の俱利迦羅、裏に梵字連台の彫物	二尺二分	昭和30年 2月	個人	
刀	精鍛彫同作龍王子源貞次 (花押) 昭和三十年二月吉日 一代精魂三作也	表に劍卷龍の額彫、裏に梵字連台の彫物	70.5cm	昭和30年 2月	個人	
刀	常眞作 昭和三十年八月吉日		二尺三寸六分	昭和30年 8月	個人	

人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

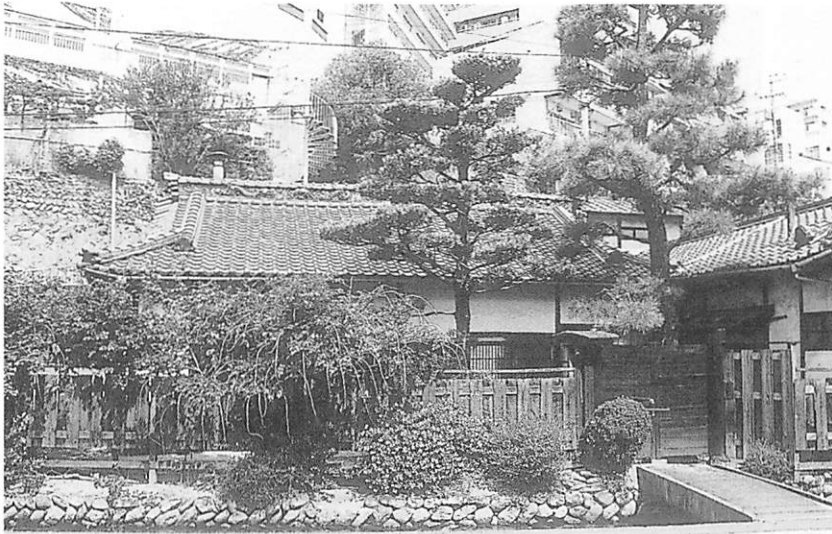
作品	銘	彫物	長さ	制作年	所蔵	備考
太刀	備前国長船住景光 元亨二年五月 日 昭和丙申年正月鶴居家重代龍泉貞次写之	樋中に小龍の彫物	二尺四寸 三分	昭和31年1月	個人	楠正成の佩刀。後に明治天皇の軍刀となる。小龍景光の称号がある。
短刀	龍泉貞次（花押）昭和三十一年二月 日	表に素剣、裏に梵字の彫物	七寸四分	昭和31年2月	個人	名刀庵丁正宗の写し。
太刀	龍泉貞次造（花押） 昭和三十一年八月 吉祥日	表裏棒樋の搔流し	二尺五寸 五分	昭和31年8月	個人	
短刀	龍泉貞次造 昭和卅一年八月 日	素剣の彫物		昭和31年8月	個人	松山城天守閣に展示。
短刀	護国神社御神宝余鉄 龍泉貞次造（花押） 守護水口義継之劍 昭和三十一年八月吉 日作之		八寸	昭和31年8月	個人	
太刀	精鍛彫同作昭和丁酉年正月吉日龍泉入道 貞次（花押）斯道三十有五年 漸悟鍛刀 之奥技 凌萬障独守古法 遺精魂於後	表に剣巻龍、裏に梵字に縛紐 の彫物	二尺三寸 五分	昭和32年1月	個人	
短刀	熱田康継面彫龍泉貞次（花押） 昭和丁 酉正月吉日彫物同作	表裏に梅竹の彫物	八寸七分	昭和32年1月	個人	
脇指	日本重要無形文化財 龍泉貞次造（花押） 以一竿子手法彫之 昭和三十三年正月吉日		一尺三寸 五分	昭和32年1月	個人	
短刀	以兼光伝龍泉貞次（花押） 昭和三十三年 二月 日彫物同作	表に草体の俱利迦羅、裏に梵 字の彫物	七寸六分	昭和32年2月	個人	
太刀	龍泉貞次造（花押） 昭和三十三年八月 吉日	表裏棒樋中に素剣の浮彫	二尺三寸 六分	昭和32年8月	個人	
太刀	備前国長船住景光 元亨二年五月 日 棟銘 昭和三十三年八月龍泉貞次写之 （花押）	表裏棒樋中に俱利迦羅と梵字 の浮彫	二尺四寸 三分	昭和32年8月	個人	楠正成の佩刀。後に明治天皇の軍刀となる。小龍景光の称号がある。
刀	精鍛彫同作龍王子源貞次（花押）斯道三十 有五年 漸悟鍛刀之奥技 凌萬障独守 古法 遺精魂於後世矣 渡部家重代		二尺三寸 七分	昭和32年	個人	
刀	切物同作龍王子源貞次（花押） 斯道三十 有五年 漸悟鍛刀之奥技 凌萬障独守 古法 遺精魂於後世矣		二尺三寸 八分	昭和32年	個人	
刀	彫物同作龍王子源貞次（花押） 斯道三十 有五年 漸悟鍛刀之奥技 不閑毀譽耐 苦難遺精魂於後世矣		二尺一寸 二分五厘	昭和32年	個人	
刀	日本重要無形文化財 龍泉入道貞次五十 六歳造（花押）		74cm	昭和33年	文化庁	当館の平成13年度「日本のわざと美」展に出品。
刀	重要無形文化財指定 刀匠龍泉貞次謹作 （花押） 応愛媛県需 昭和三十三年二月吉日		二尺二寸 九分	昭和33年2月	愛媛県美術館	県生涯学習センター「メモリアルホール」に展示。
脇指	重要無形文化財指定 刀匠龍泉貞次謹彫 同作（花押） 応愛媛県需 昭和三十三年 二月吉日	表に竹、裏に梅の彫物	一尺一寸 五分	昭和33年2月	愛媛県美術館	県生涯学習センター「メモリアルホール」に展示。
刀	日本重要無形文化財 龍泉貞次造（花押） 以一竿子手法彫之依鶴居家需 昭和三十 四年正月吉日		二尺三寸 七分五厘	昭和34年1月	個人	
短刀	重要無形文化財 龍泉貞次鍛彫（花押） 他江不可渡之 昭和三十四年正月吉日		八寸五分	昭和34年1月	個人	

作品	銘	彫物	長さ	制作年	所蔵	備考
太刀	昭和卅二年二月吉日龍泉貞次造（花押） 斯道三十有八年 漸悟脩伝之奥義 不閑 毀譽耐苦難 遺精魂於後世矣		79cm	昭和34年2月	文化庁	当館の平成13年度「日本のわざと美」展に出品。
短刀	重要無形文化財 龍泉高橋貞次彫同作 昭和三十四年五月吉日（花押）		九寸六分	昭和34年5月	個人	
短刀	皇太子妃御守刀以余鉄 龍泉貞次謹鍛彫 之 御成婚記念 昭和三十五年正月吉日		八寸八分	昭和35年1月	個人	
短刀	皇太子妃御守刀以余鉄 龍泉貞次謹鍛彫 之 御成婚記念 昭和三十五年正月吉日		七寸六分	昭和35年1月	個人	
短刀	御下命以余鉄 龍泉貞次 皇太子殿下御 成婚記念 昭和三十五年正月吉日		七寸五分	昭和35年1月	個人	
脇指	彫物同作龍泉貞次（花押）余光萬世土岐 家重代 昭和卅五年二月吉日		一尺一寸 二分	昭和35年2月	個人	
短刀	皇孫浩宮徳仁親王御守刀以余鉄 龍泉貞 次謹鍛彫之（花押） 重代家宝累世伝 昭和三十五年八月吉日		九寸四分 五厘	昭和35年8月	個人	
刀	日本重要無形文化財 龍泉貞次彫同作 （花押） 一竿子以手法彫之 昭和三十 六年二月吉日		二尺五寸 二分	昭和36年2月	個人	
短刀	庖丁正宗写 龍泉貞次（花押） 昭和卅七 年二月吉日 彫物同作	護摩箸の透彫に表裏に彫られ た爪	21.8cm	昭和37年2月	個人	「享保名物帳」掲載の内 藤右京家所有の庖丁正宗 の写し。
太刀	龍泉高橋貞次六十一歳鍛彫之（花押）昭 和三十八年八月吉祥日	剣巻龍の彫物		昭和38年8月	個人	松山城天守閣に展示。
刀	日本重要無形文化財 龍泉高橋貞次六十 二歳彫同作（花押） 昭和卅九甲辰年八 月吉日 応田口正義齋作之	表に昇り龍、裏に降り龍の彫 物	71.8cm	昭和39年8月	個人	
短刀	日本重要無形文化財 龍泉貞次（花押） 浩宮様御守刀以余鉄 昭和四十年正月吉日		八寸五分 五厘	昭和40年1月	個人	
太刀	昭和四十年八月吉日龍泉貞次彫同作（花 押） 成皆懐恋慕椿故み弥母 武州隅田 川辺応千葉一雄齋	表に剣巻龍、裏に正観音梵字 の彫物	74.8cm	昭和40年8月		毎日新聞・日本美術刀剣 保存協会主催で、昭和41 年10月25日～30日まで東 京上野の松坂屋で開催さ れた「現代名刀五人展」 の出品作品。
太刀	日本重要無形文化財 龍泉高橋貞次六十 四歳鍛彫之（花押） 昭和四十一年正月吉 日 応岩城忠雄齋及心処不可有此上者也	表に昇り龍、裏に降り龍の彫 物	71cm	昭和41年1月	個人	
刀	日本重要無形文化財 龍泉高橋貞次彫同 作（花押） 皇孫御守刀以余鉄為鋒石家重 代 昭和四十一年正月吉日		二尺四寸 八分	昭和41年1月	個人	
短刀	昭和四十一年正月吉日 龍泉貞次彫同作（花 押）為鋒石文彦作之 礼宮様御守刀以余鉄		七寸五分	昭和41年1月	個人	
短刀	昭和四十一年正月吉日 龍泉貞次（花押） 為曾我良子作之 皇太子妃御守刀以余鉄		七寸一分	昭和41年1月	個人	

人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

作品	銘	彫物	長さ	制作年	所蔵	備考
短刀	日本重要無形文化財龍泉貞次彫同作（花押） 昭和四十一年八月吉日皇孫御身刀以余鉄	粟田口伝八寸五分五つ龍護摩箸彫	25.7cm	昭和41年8月		毎日新聞・日本美術刀剣保存協会主催で、昭和41年10月25日～31日まで東京上野の松坂屋で開催された「現代名刀五人展」の出品作品。
短刀	写庵丁正宗龍泉貞次（花押） 皇孫御守刀以余鉄 昭和四十一年八月 日		六寸八分	昭和41年8月	個人	
刀	日本重要無形文化財 龍泉高橋貞次六十五歳彫同作（花押） 及心不可有此上者也 昭和四十二年二月吉日		二尺二寸八分	昭和42年2月	個人	
短刀	日本重要無形文化財 龍泉貞次鍛彫之（花押） 皇孫御守刀以余鉄 昭和四十二年二月吉日		七寸四分	昭和42年2月	個人	
短刀	日本重要無形文化財 龍泉貞次鍛彫之 昭和四十二年二月吉日 皇孫御守刀以余鉄（花押）	表に素剣、爪、裏に梵字の彫物	22.1cm	昭和42年2月	刀剣博物館	「享保名物帳」掲載の武州忍松平家伝来の庵丁正宗の写し。
脇指	奉納尾州熱田大明神 影打 龍泉貞次六十六歳彫同作（花押） 昭和四十三年正月吉日	表に竹・裏に梅の彫物	35cm	昭和43年1月	個人	越前康継が熱田神宮に奉納した本歌の写し。
刀	重要無形文化財 龍泉高橋貞次彫同作（花押） 最晩年作也 昭和四十六年十一月吉日 月山貞一切銘（花押）	表に昇り龍、裏に降り龍の彫物		昭和46年11月	個人	松山城天守閣で展示。最晩年の作。人間国宝の月山貞一が銘を切ったもの。
刀	彫同作龍王子源貞次（花押） 斯道三十有五年 漸悟鍛刀之奥技 凌萬障独守古法 遺精魂於後世矣	表に俱利迦羅、裏に梵字、護摩箸の彫物	二尺二寸三分		個人	無形文化財審議会に出品。
刀	常真作 斯道三十有五年 漸悟鍛刀之奥技 凌萬障独守古法 遺精魂於後世矣	表に昇り龍、裏に降り龍の彫物	二尺四寸		個人	第二回全日本新作刀展に出品。優勝し第一席となる。
刀	精鍛彫同作龍王子源貞次（花押） 斯道三十有五年 漸悟鍛刀之奥技 凌萬障独守古法 遺精魂於後世矣	表に俱利迦羅、裏に梵字楕形の彫物	二尺三寸七分		個人	
短刀	貞次	護摩箸の透彫	六寸六分		個人	名刀庵丁正宗の写し。
短刀	貞次	表に素剣、爪、裏に梵字の彫物	六寸九分		個人	名刀庵丁正宗の写し。
短刀	（花押）影		八寸八分		個人	護国神社御神宝の影打。粟田口吉光伝直刀小乱の気品ある作品。
短刀	（花押）影		八寸五分五厘		個人	
脇指	彫同作龍泉入道貞次（花押） 水口義春 還暦之秋		一尺三寸五分		個人	

本表のデータは高橋貞次の刀剣展覧会目録などの文献資料を参考に抽出し、制作年順に配列した。すべての作品を筆者が実見したのではなく、不明な項目は空欄のままとした。長さの単位はあえて統一しなかった。



写真① 現在の鍛錬場  
(平成13年撮影)



写真② 絵葉書に見る往時の鍛錬場

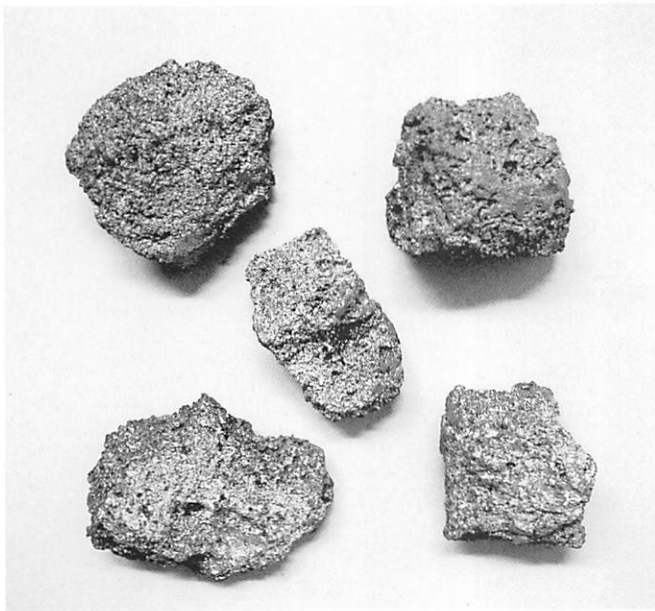


写真③ 現在の鍛錬場内部 (平成13年撮影)

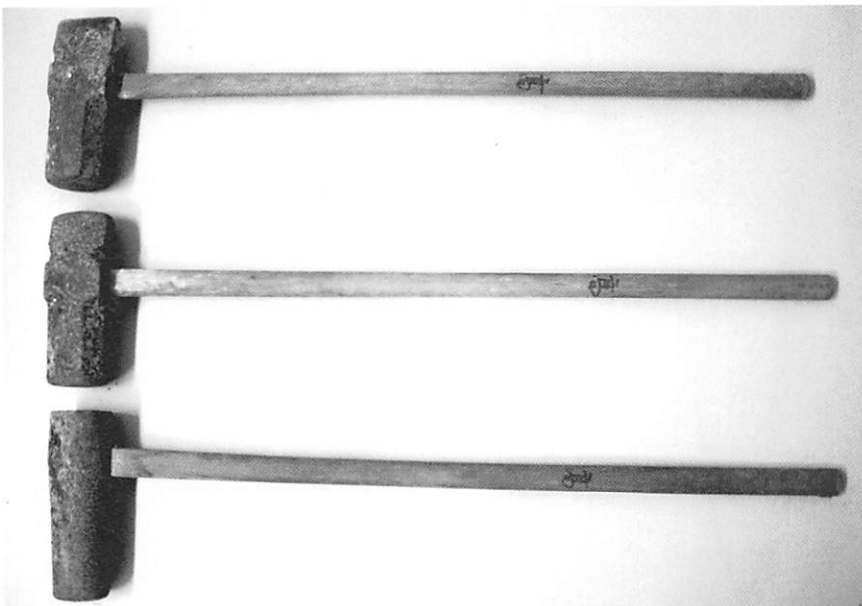




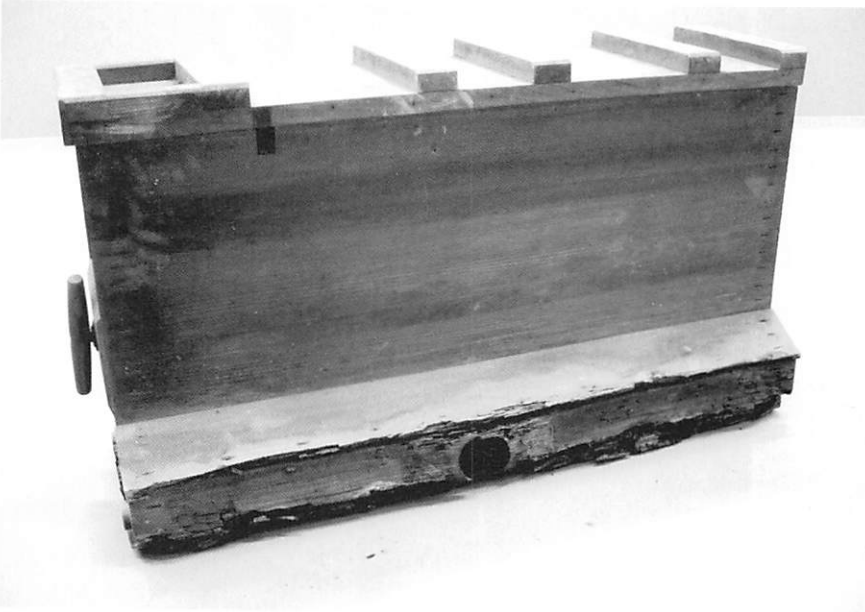
写真④ 作刀の様子  
(昭和40年代頃)  
高橋貞喜氏提供



写真⑤ 玉鋼



写真⑥ 向槌



写真⑦ 箱



写真⑧ 塗り台



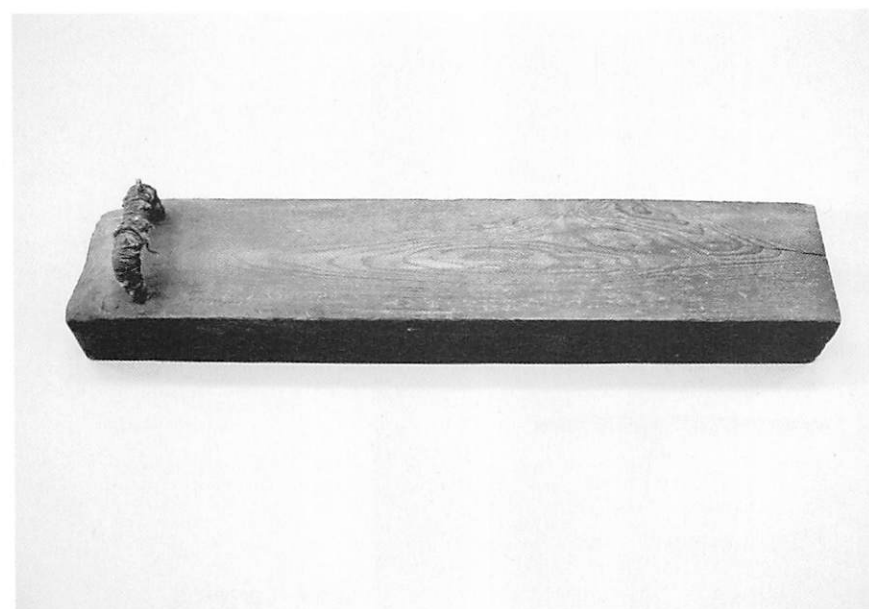
写真⑨ 平箸



写真⑩ テコ棒



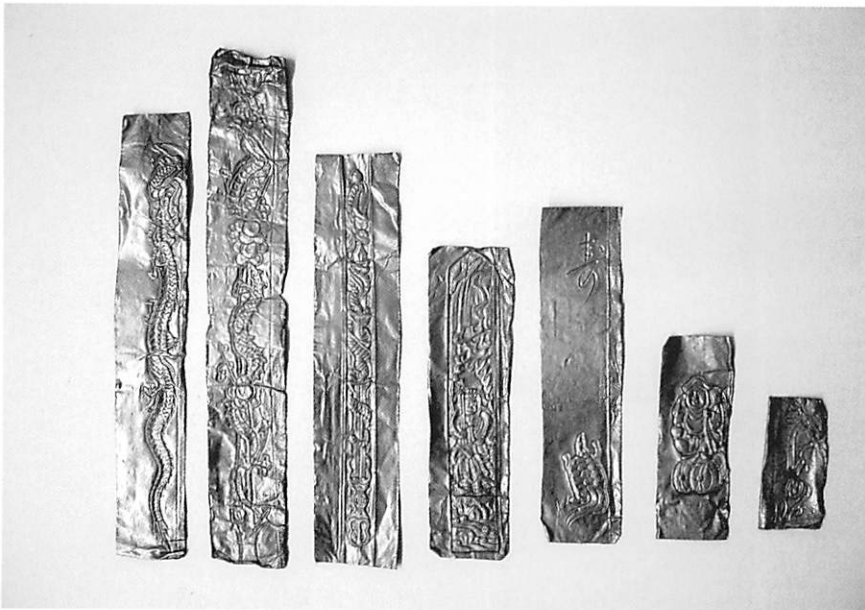
写真⑪ セン鋤



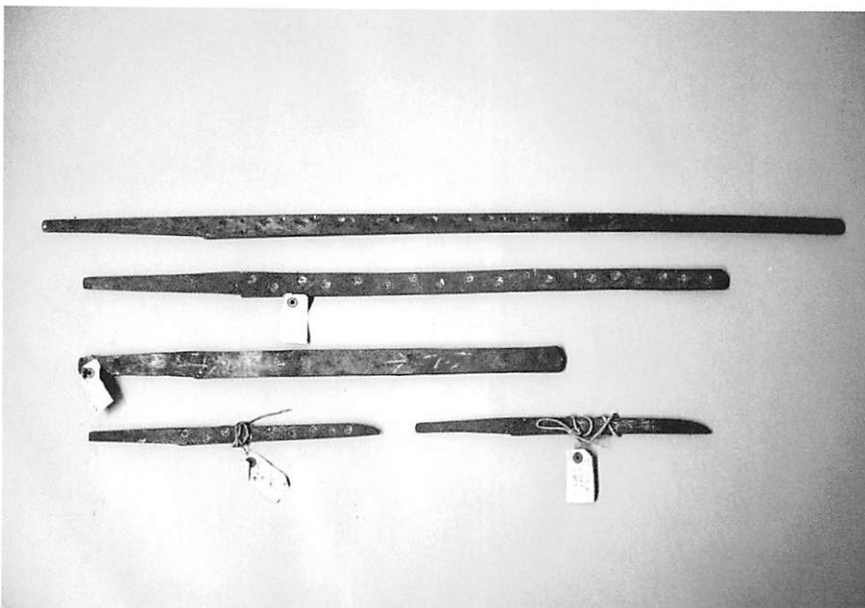
写真⑫ 居床



写真⑬ 彫刻用具



写真⑭ 刀身彫刻の型どり



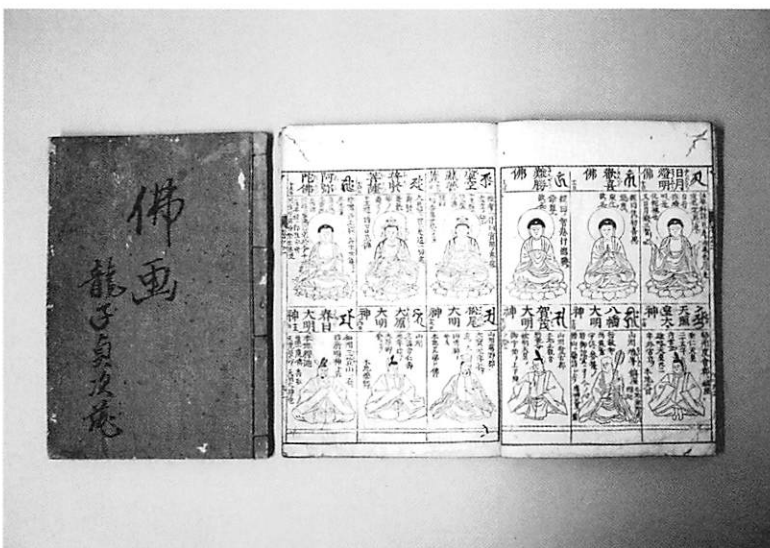
写真⑮ 素延べ品



写真⑩ 木札



写真⑪ 『古刀銘盡大全』



写真⑫ 『佛画』

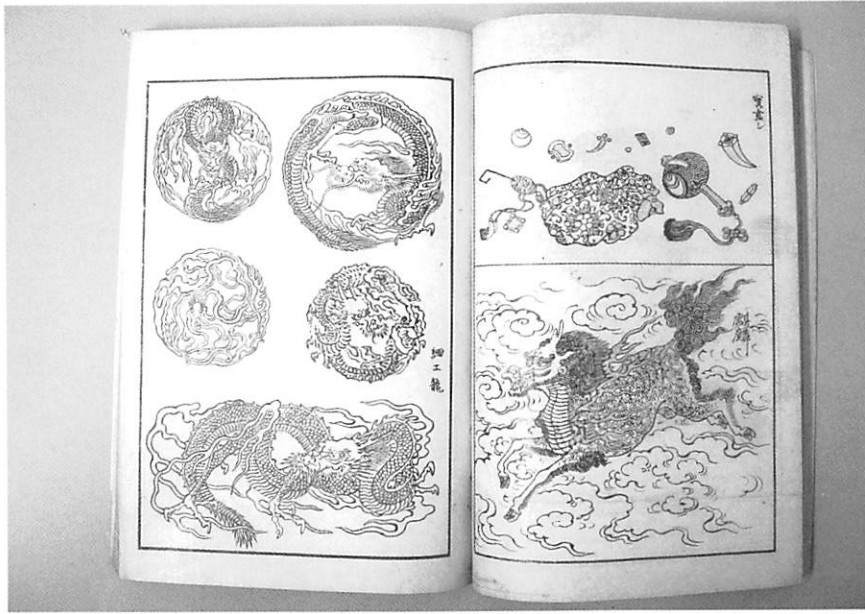


写真19 細工龍の図案

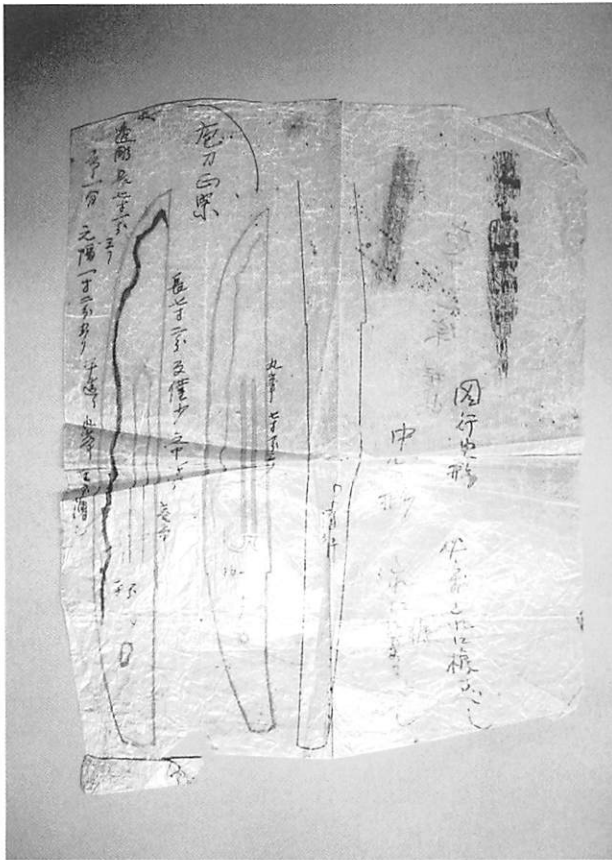


写真21 スケッチ (「庖刀正宗」他)

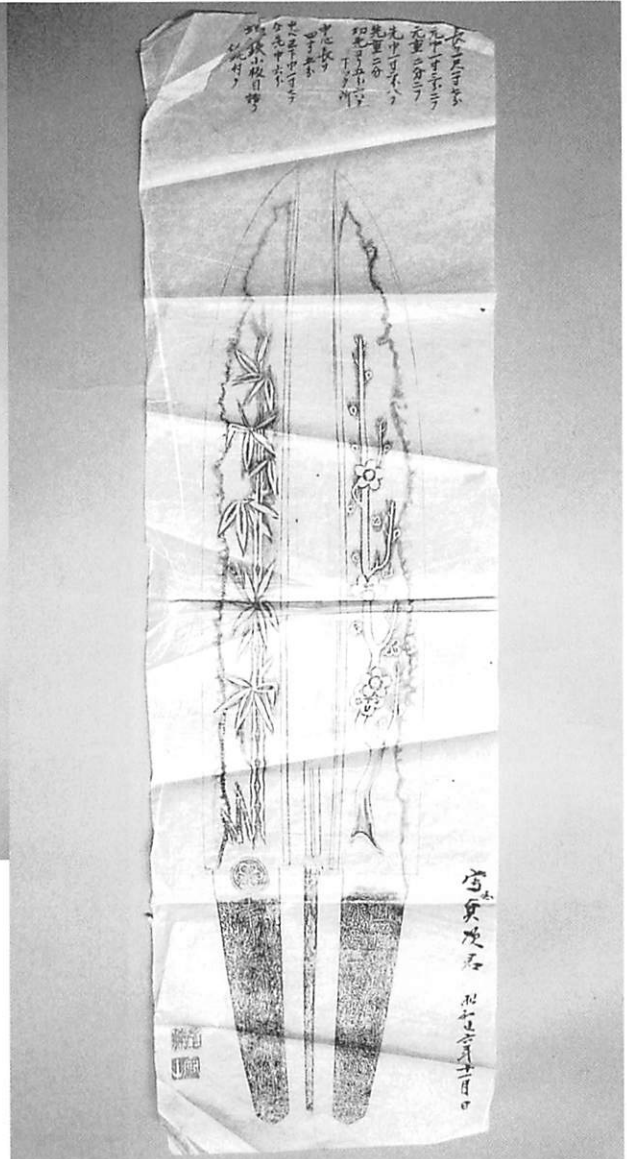
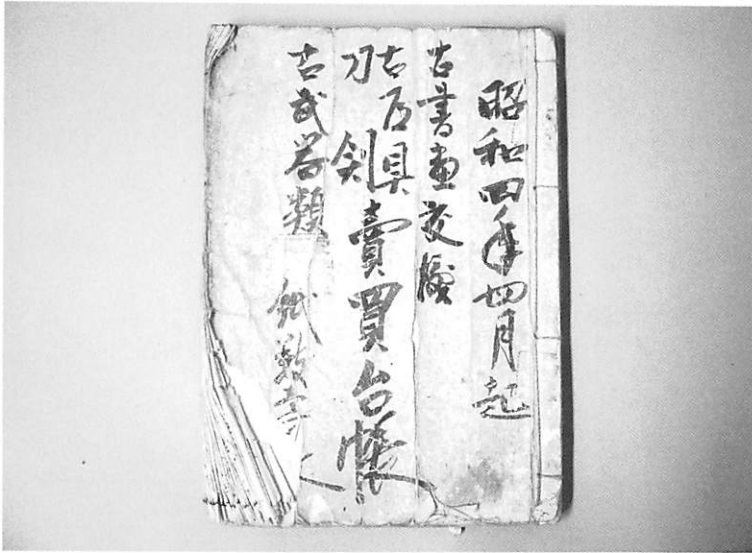


写真20 拓図 (熱田神宮宝物の脇差)



写真⑳ 昭和四年四月起  
古書画刀剣売買台帳



写真㉓ 高橋貞次直筆の黒板



写真㉔ 高橋貞次肖像



写真⑳ 官幣大社水無瀬神宮第一回全国刀匠選抜奉仕の様子（昭和16年）



写真㉑ 展覧会目録



高橋貞次関係資料一覧（当館寄託）

本表における資料の配列は1. 大分類、2. 小分類、3. 年代の順に並べ替えたものである。

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
1	鍛冶道具類	原料・材料	彫りの中を磨く砥石	一括	昭和43年 (1968)	砥石の小片。何種類かに分類されている。木箱に保管（箱書きに昭和四十三年五月迄使用とある）。	
2	鍛冶道具類	原料・材料	砂鉄	一括	昭和43年頃 (1968)	カンに保管。手紙付き。それによると、中国地方産の砂鉄で、福山市の刀剣愛好家が贈ったもの。	
3	鍛冶道具類	原料・材料	削り滓	一括		木箱に保管。	
4	鍛冶道具類	原料・材料	玉鋼	一括		箱書きに「極上出羽玉鋼」とある。	写真⑤
5	鍛冶道具類	原料・材料	砥石	5			
6	鍛冶道具類	原料・材料	ホウ砂	1			
7	鍛冶道具類	原料・材料	焼刃土	一括		木箱に保管。	
8	鍛冶道具類	製作道具	居床	1	大正12年 (1923)	台裏に「大正十二年三月吉日龍子貞次」の墨書銘あり。	写真⑫
9	鍛冶道具類	製作道具	定規	1	大正12年 (1923)	裏に「大正十二年三月吉日龍子貞次所有」の墨書銘あり。	
10	鍛冶道具類	製作道具	塗り台 小	1		焼き刃土を刀身に塗る土取りの作業で使用する台。	写真⑧
11	鍛冶道具類	製作道具	塗り台 中	1		焼き刃土を刀身に塗る土取りの作業で使用する台。	写真⑧
12	鍛冶道具類	製作道具	木槌	1			
13	鍛冶道具類	製作道具	金槌	1		木箱に保管。	
14	鍛冶道具類	製作道具	炭かき	1			
15	鍛冶道具類	製作道具	松炭俵	3			
16	鍛冶道具類	製作道具	セン鋤	2		木箱に保管。	写真⑪
17	鍛冶道具類	製作道具	鑿	5			
18	鍛冶道具類	製作道具	槌	2			
19	鍛冶道具類	製作道具	アテレビシ	3			
20	鍛冶道具類	製作道具	土取りヘラ	1		木箱に保管。	
21	鍛冶道具類	製作道具	羽口	1			
22	鍛冶道具類	製作道具	平箸	12			写真⑨
23	鍛冶道具類	製作道具	櫛	1		「大極上四尺 四寸高 五分廣 特殊名」の墨書銘がある。	写真⑦
24	鍛冶道具類	製作道具	ブラシ	1		木箱に保管。	
25	鍛冶道具類	製作道具	向槌	3			写真⑥
26	鍛冶道具類	製作道具	鍬	47		木箱に保管。	
27	鍛冶道具類	製作道具	焼刃舟 小	1			
28	鍛冶道具類	製作道具	焼刃舟 大	1			
29	鍛冶道具類	製作道具	剣巻龍の彫刻の型どり	1		石膏製。	
30	鍛冶道具類	製作道具	刀身彫刻の型どり	36		鉛製。大黒1、不動明王6、寿亀1、蓮華2、梅1、梵字2、人物1、波1、龍5、梅龍2、剣巻龍14点。	写真⑭
31	鍛冶道具類	製作道具	彫刻用具	一式		ルーベ、砥石、銘切り台、小槌、小鑿などの彫刻道具。	写真⑬
32	鍛冶道具類	製作道具	彫刻之具	23	昭和43年 (1968)	柄、砥石付属。木箱に保管（箱書きに昭和四十三年八月吉日とある）。	
33	鍛冶道具類	製作道具	ハチノス	1			
34	鍛冶道具類	製作道具	焼柄	3		柄に布をまきつけている。	
35	鍛冶道具類	製作道具	テコ棒	7		柄に縄をまきつけている。	写真⑩
36	鍛冶道具類	製作道具	莖	1	昭和38年 (1963)	銘「於松山オースチンケイス作之」。	

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
37	鍛冶道具類	半製品	素延べ品	23		刀、短刀の素延品。一部に状態を記した札がつけられている。木箱に保管。	写真⑤
38	鍛冶道具類	半製品	火造りを終えた刀身	1		鑄造り。長さ68.5cm。	
39	鍛冶道具類	木札	「祝日本刀展御入選 愛媛刀剣会 有志 首相賞獲得」	1	昭和10年 (1935)	第一回新作刀展で総理大臣賞を受賞した時のもの。	写真⑥
40	鍛冶道具類	木札	「三笠宮家御下命御護刀謹作中 龍王子源貞次」	1	昭和11年 (1936)		写真⑥
41	鍛冶道具類	木札	「大塔宮鎌倉八幡宮御寶刀謹作中 昭和十五年七月吉日 龍王子源貞次」	1	昭和15年 (1940)	鎌倉八幡宮の御神宝刀を制作した時のもの。	写真⑥
42	鍛冶道具類	木札	「陸軍省御下命 朝香大将宮殿下御太刀 謹作中」	1	昭和16年 (1941)		写真⑥
43	鍛冶道具類	信仰	伊佐爾波神社神符	1		伊佐爾波神社（愛媛県松山市）。	
44	鍛冶道具類	信仰	稲荷神社開運御守	1			
45	鍛冶道具類	信仰	大山祇神社神符	1		大山祇神社（愛媛県大三島町）。	
46	鍛冶道具類	信仰	鍛冶御祖神祭御護	1			
47	鍛冶道具類	信仰	御札	1			
48	鍛冶道具類	信仰	金毘羅大権現神符	1		金毘羅大権現（香川県）。	
49	鍛冶道具類	信仰	新勝寺御札	1		成田山新勝寺（千葉県）。	
50	鍛冶道具類	信仰	多賀大社祈願神符	1		多賀大社（滋賀県）。	
51	鍛冶道具類	信仰	小祠	1			
52	鍛冶道具類	信仰	水無瀬神宮除魔之剣	1		水無瀬神宮（大阪府）。竹製。	
53	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀銘盡 卷之二	1	享保14年刊 (1729)		
54	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀銘盡 卷之三	1	享保14年刊 (1729)		
55	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀銘盡 卷之四	1	享保14年刊 (1729)		
56	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀銘盡 卷之五	1	享保14年刊 (1729)		
57	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀銘盡 卷之六	1	享保14年刊 (1729)		
58	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 一	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
59	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 二	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
60	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 三	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
61	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 四	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
62	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 五	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
63	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 六	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
64	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 七	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
65	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 八	1	寛政4年刊 (1792)		写真⑦
66	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古刀銘盡大全 九	1	寛政4年刊 (1792)	「昭和六年六月名古屋金正堂ニテ求之（出所大垣市）」の墨書銘あり。	写真⑦
67	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀辨疑 卷之五	1	安永6年刊 (1777)	別名「慶長以来新刀辨疑」。	
68	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	大日本刀剣商工名鑑	1	昭和17年 (1942)		
69	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	縮刷 刀工総覧	1	昭和3年 (1928)	本阿弥光彦・室津鯨太郎編。	
70	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	新刀名作集	1	昭和3年 (1928)	一部焼損。大阪刀剣会発行。	
71	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	古今金工全集	1	昭和31年 (1956)		
72	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	おなじみの愛刀家必携（33年版） 古刀新刀価格表一組	1	昭和33年 (1958)		

人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
73	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	昭和三十二年十二月二十日指定第二回重要刀剣等図譜	10	昭和34年(1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
74	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	名刀図鑑 第二十輯の紙片	1	昭和34年(1959)	藤代松雄編。	
75	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	予州刀工年表	1	昭和34年(1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会愛媛県支部発行。	
76	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	刀剣情報附録「本阿弥光賀撰装剣彫鑑 鑿工大鑑」	1	昭和36年(1961)	装剣彫鑑鑿工の相模番付。	
77	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	日光の名刀	1	昭和37年(1962)		
78	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	熱田神宮宝物	1	昭和41年(1966)		
79	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	美術家名鑑	1	昭和41年(1966)	現代著名刀匠として筆頭に紹介されている。	
80	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	明治百年記念第十二回剣美展 明治天皇と明治の愛刀家達	1	昭和42年(1967)	中日新聞・日本美術刀剣保存協会名古屋支部主催で名鉄百貨店で開催。短刀「龍泉映貞次造他江不可渡之 昭和四十一年」を出品。	
81	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	刀誌 目録 刀剣美術工芸品附価格表	1			
82	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	好古刀剣抄録 本阿弥光遜先生	1			
83	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	刀剣押形の小冊子	1			
84	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	泰平萬代 人成武鑑 卷之二 御役人衆	1			
85	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	泰平萬代 人成武鑑 卷之四 西御丸御役人衆	1			
86	典籍・記録類	刀剣・刀工図鑑類	名刀の図版	5		国宝短刀「無銘正宗」、国宝脇差「無銘貞宗」などがある。雑誌「刀剣美術」の切り抜き。	
87	典籍・記録類	仏画・図案類	種類集	1	寛文7年刊(1667)	「大正十年九月吉日求之 龍子貞次藏書」の墨書銘あり。	
88	典籍・記録類	仏画・図案類	図案集	1	明治43年刊(1910)	中住道雲著。貞次が大切にしていた本。細工龍の挿絵あり。	写真⑩
89	典籍・記録類	仏画・図案類	刀剣図案	1		庵刀正宗の図。	
90	典籍・記録類	仏画・図案類	卍案	1			
91	典籍・記録類	仏画・図案類	佛画	1			写真⑪
92	典籍・記録類	仏画・図案類	佛画	1			
93	典籍・記録類	刀剣雑誌	愛剣 第2巻第9号第10号	1	昭和3年(1928)	大阪刀剣会発行。宗長作不動明王彫刻、刀剣彫物の研究などが掲載。	
94	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第2号	1	昭和25年(1950)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
95	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第21号	1	昭和28年(1953)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
96	典籍・記録類	刀剣雑誌	日本及日本趣味	1	昭和28年(1953)	謹賀新年の欄に「四国地方顧問役国工院名誉会員 権大宗匠 日本刃物工芸伝習所第二〇工場主 松山市道後石水町 高橋貞次」とある。	
97	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣と歴史 復刊第1号	1	昭和29年(1954)	刀剣保存会発行。	
98	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣と歴史 復刊第4号	1	昭和29年(1954)	刀剣保存会発行。	
99	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第27号	1	昭和29年(1954)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
100	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第28号	1	昭和29年(1954)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
101	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第29号	1	昭和29年(1954)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
102	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第30号	1	昭和29年(1954)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
103	典籍・記録類	刀剣雑誌	趣味のかたな 第6号	1	昭和30年(1955)	主幹本阿弥光遜、日本刀研究会発行。	
104	典籍・記録類	刀剣雑誌	趣味のかたな 第7号	1	昭和30年(1955)	主幹本阿弥光遜、日本刀研究会発行。	
105	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣と歴史 復刊第5号	1	昭和30年(1955)	刀剣保存会発行。	
106	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣と歴史 復刊第6号	1	昭和30年(1955)	刀剣保存会発行。	

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
107	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣と歴史 復刊第9号	1	昭和30年 (1955)	刀剣保存会発行。	
108	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第31号	1	昭和30年 (1955)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
109	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第32号	1	昭和30年 (1955)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
110	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第33号	1	昭和30年 (1955)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
111	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第34号	1	昭和30年 (1955)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。作刀技術発表会出品心得等掲載	
112	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第35号	1	昭和30年 (1955)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
113	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第36号	1	昭和30年 (1955)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
114	典籍・記録類	刀剣雑誌	趣味のかたな 終刊号	1	昭和31年 (1956)	主幹本阿弥光遜、日本刀研究会発行。本阿弥光遜先生追悼号。	
115	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第37号	1	昭和31年 (1956)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第二回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。貞次は刀「常真彫同作 斯道三十有五年云々」が特賞。	
116	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第38号	1	昭和31年 (1956)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
117	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第39号	1	昭和31年 (1956)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
118	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第40号	1	昭和31年 (1956)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
119	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第41号	1	昭和31年 (1956)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
120	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第42号	2	昭和31年 (1956)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
121	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第43号	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
122	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第44号	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第三回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。	
123	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第45号	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
124	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第46号	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
125	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第47号	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
126	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第48号	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
127	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術48号別冊 貴重刀剣小道具認定目録 昭和31年度分	1	昭和32年 (1957)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
128	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第123号	1	昭和33年 (1958)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
129	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第49号	1	昭和33年 (1958)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
130	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第51号	1	昭和33年 (1958)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。本間順治・高橋貞次「新作刀に対する注文」掲載。第四回作刀展の授賞式での本間審査員と貞次刀匠の作刀技術に関する問答の録音記録。	
131	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第52号	1	昭和33年 (1958)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
132	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第53号	1	昭和33年 (1958)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
133	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第54号	1	昭和33年 (1958)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
134	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第55号	1	昭和34年 (1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
135	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第56号	1	昭和34年 (1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第五回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。貞次は無鑑査で刀「昭和卅四年二月吉日竜泉貞次造(花押) 斯道三十有八年云々」、短刀「日本重要無形文化財 竜泉貞次彫同作(花押) 斯道三十有八年云々」、短刀「重要無形文化財 昭和三十三年云々」を出品。	
136	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第57号	1	昭和34年 (1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。松山大会所感が掲載されている。	
137	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第58号	1	昭和34年 (1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
138	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第59号	1	昭和34年 (1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	

人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
139	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第60号	1	昭和34年 (1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
140	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第61号	1	昭和35年 (1960)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
141	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第62号	1	昭和35年 (1960)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
142	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第63号	1	昭和35年 (1960)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第六回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。貞次は無鑑査で刀「昭和三十五年二月日 竜泉貞次五十八歳造(花押)云々」を出品。	
143	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第64号	1	昭和35年 (1960)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
144	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第65号	1	昭和35年 (1960)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
145	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第66号	1	昭和35年 (1960)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
146	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第67号	1	昭和36年 (1961)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
147	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第68号	1	昭和36年 (1961)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
148	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第69号	1	昭和36年 (1961)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第七回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。貞次は無鑑査で刀「昭和三十五年八月吉日 竜泉高橋貞次五十八歳造(花押)云々」、短刀「昭和三十五年八月吉日 皇孫殿下云々」を出品。	
149	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第70号	1	昭和36年 (1961)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
150	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第71号	2	昭和36年 (1961)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
151	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第73号	1	昭和37年 (1962)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
152	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第74号	1	昭和37年 (1962)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。目次等が切り取られている。	
153	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第75号	1	昭和37年 (1962)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
154	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第76号	1	昭和37年 (1962)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
155	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第77号	1	昭和37年 (1962)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
156	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第78号	1	昭和37年 (1962)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
157	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊1号	1	昭和37年 (1962)	犬塚壽仙編集。	
158	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊2号	1	昭和37年 (1962)	犬塚壽仙編集。	
159	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊3号	1	昭和37年 (1962)	犬塚壽仙編集。	
160	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣趣味 第58号	1	昭和38年 (1963)	宮形武次(東雲)発行。	
161	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第79号	1	昭和38年 (1963)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
162	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第81号	1	昭和38年 (1963)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第九回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。貞次は無鑑査で刀「竜泉高橋貞次六十一歳鑄之(花押) 昭和三十八年云々」、刀「竜泉高橋貞次六十一歳造(花押) 昭和三十八年云々」、刀「竜泉高橋貞次六十一歳造(花押) 昭和三十八年云々」、太刀「大楠公佩刀 小竜景光拂写 昭和三十七年云々」を出品。	
163	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第84号	1	昭和38年 (1963)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
164	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 別冊Ⅱ 貴重刀剣等認定目録-昭和32~33年度-	1	昭和38年 (1963)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。貞次は太刀「備州長船康光」、太刀「備州長船忠光 文明十二年八月日」を所蔵。	
165	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊4号	1	昭和38年 (1963)	犬塚壽仙編集。	
166	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊5号	1	昭和38年 (1963)	犬塚壽仙編集。	
167	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊6号	1	昭和38年 (1963)	犬塚壽仙編集。	
168	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊7号	1	昭和38年 (1963)	犬塚壽仙編集。	

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
169	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第85号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
170	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第86号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
171	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第87号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
172	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第88号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。第十回作刀技術発表会入選者氏名が掲載。頁次は無鑑査で太刀「竜泉高橋貞次六十一歳鎧彫之(花押) 昭和三十八年八月吉日日 尽心技之限 忘金山繁次需」を出品。	
173	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第89号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。「人間国宝刀匠展から」掲載。上野松阪屋で開催。	
174	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第90号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
175	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第91号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
176	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第92号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
177	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第93号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
178	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第94号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
179	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第95号	1	昭和39年 (1964)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
180	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊9号	1	昭和39年 (1964)	犬塚壽仙編集。	
181	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊10号	1	昭和39年 (1964)	犬塚壽仙編集。会員住所録掲載。	
182	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊11号	1	昭和39年 (1964)	犬塚壽仙編集。	
183	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第96号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。富岡大二「伊予刀工三好家文書について」掲載。	
184	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第97号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
185	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第99号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
186	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第101号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
187	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第102号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。高橋清勝「伊予刀工の研究(2)」掲載。	
188	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第103号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。高橋清勝「伊予刀工の研究(3)」掲載。	
189	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第104号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
190	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第105号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
191	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第106号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
192	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第107号	1	昭和40年 (1965)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
193	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊12号	1	昭和40年 (1965)	犬塚壽仙編集。	
194	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊13号	1	昭和40年 (1965)	犬塚壽仙編集。	
195	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊15号	1	昭和40年 (1965)	犬塚壽仙編集。	
196	典籍・記録類	刀剣雑誌	剣と文 第9号	1	昭和40年 (1965)	剣と文社発行。	
197	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第108号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
198	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第109号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
199	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第110号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
200	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第111号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。馬の図柄展(1)掲載。	
201	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第112号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。馬の図柄展(2)掲載。	
202	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第113号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
203	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第114号	1	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	

人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
204	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第115号	23	昭和41年 (1966)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
205	典籍・記録類	刀剣雑誌	春霞刀苑 通刊16号	1	昭和41年 (1966)	大塚謙仙編集。	
206	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第123号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。末光高義「伊予大洲藩抱岡本刀工の研究」掲載。	
207	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第125号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。末光高義「伊予大洲藩抱岡本刀工の研究(続)」掲載。	
208	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第126号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
209	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第127号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
210	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第128号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
211	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第130号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
212	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第131号	1	昭和42年 (1967)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
213	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第132号	1	昭和43年 (1968)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
214	典籍・記録類	刀剣雑誌	刀剣美術 第141号	1	昭和43年 (1968)	財団法人日本美術刀剣保存協会発行。	
215	典籍・記録類	拓図・スケッチ類	「昭和三十三年一月吉日 龍泉高橋貞次謹作」の拓図	1	昭和33年 (1968)	貞次による拓図。	
216	典籍・記録類	拓図・スケッチ類	重要文化財脇差「奉納尾州熱田神宮」「両御所様被召出於武州江戸御剣作御紋康之字被下龍上刻龍越前康継」の拓図	1	昭和36年 (1961)	貞次による拓図。	写真㉑
217	典籍・記録類	拓図・スケッチ類	「龍の彫刻」の拓図	2		貞次による拓図。	
218	典籍・記録類	拓図・スケッチ類	「応刀正宗」などのスケッチ	1		貞次によるスケッチ。	写真㉒
219	典籍・記録類	帳簿	昭和四年四月起 古歯刀剣売買台帳	1	昭和4~19年 (1929~44)		写真㉓
220	典籍・記録類	帳簿	黒板	1	昭和40年頃 (1965)	高橋貞次の自筆注文控え。	写真㉔
221	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「官幣大社水無瀬神宮第一回全国刀匠選抜奉仕」	8	昭和16年 (1941)	朝香宮殿下は官幣大社水無瀬神宮で刀匠高橋貞次に短刀一口を造らせ、水無瀬神宮に御奇進した。	写真㉕
222	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「官幣大社水無瀬神宮第一回全国刀匠選抜奉仕」	6	昭和16年 (1941)	額装。中央養成所時代の頃と思われる。	
223	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「恩師月山貞勝先生肖像」	1		額装。	
224	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「高橋貞次肖像」	1		烏帽子直垂姿。	写真㉖
225	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「高橋貞次肖像」	1		額装。	
226	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「高橋貞次の第十三回愛媛新聞賞贈呈式」	1	昭和40年 (1965)	額装。	
227	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	古写真「弥勒菩薩像」	1		額装。	
228	典籍・記録類	古写真・絵葉書類	絵葉書「鍛錬場事務所高橋龍王子源貞次」	1		鳥居門にかかる木札に「日本刀鍛錬場御刀匠龍王子源貞次」とある。	写真㉗
229	典籍・記録類	出品目録類	後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀奉納会報告書	1	昭和14年 (1939)	後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀奉納会の報告書。高橋貞次が水無瀬神宮へ奉納した刀「銘 神前 後鳥羽天皇 七百年祭奉賛新作刀奉納会 昭和十四年三月大吉日 源貞次謹作(花押)」の押形、兄の高橋義宗が隠岐神社へ奉納した刀「銘 神前 後鳥羽天皇七百年祭 奉賛新作刀奉納会 昭和十二年三月吉日源義宗謹作」の押形が収められている。	
230	典籍・記録類	出品目録類	第一回無形文化財日本伝統工芸展	1	昭和29年 (1954)	展覧会パンフレット。主催文化財保護委員会・財団法人文化財協会、後援朝日新聞社、会場日本橋三越。無形文化財選定工芸家芳名に貞次の略歴が紹介されている。	
231	典籍・記録類	出品目録類	新作美術刀剣展目録	2	昭和30年 (1955)	東京都教育委員会・財団法人日本美術刀剣保存協会主催で東京都美術館で開催。出品作品の刀「備前国長船住景光」が特賞を受賞。裏表紙に直筆メモあり。	写真㉘
232	典籍・記録類	出品目録類	鎌倉・室町名刀展 出品目録並解説	1	昭和30年 (1955)	主催鎌倉市教育委員会・神奈川県教育委員会、後援東京国立博物館・美術刀剣保存協会・鎌倉刀剣会、会場鎌倉国宝館。	

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
233	典籍・記録類	出品目録類	重要無形文化財 刀匠高橋貞次名刀展目録	14	昭和32年(1957)	愛媛県・愛媛県教育委員会・重要無形文化財高橋貞次技術保存対策委員会主催、日本美術刀剣保存協会愛媛県支部後援で、三越松山支店で開催した際の出品目録。68件の作品を出品。	写真②
234	典籍・記録類	出品目録類	新作刀展示会目録(附 名刀抜粋解説)	1	昭和32年(1957)	日本刀同好研究会主催。裏表紙に自筆メモあり。	
235	典籍・記録類	出品目録類	日本美術名刀展覧会	2	昭和34年(1959)	高知県教育委員会等が主催で高知大丸で開催。	
236	典籍・記録類	出品目録類	第八回全国大会支部出陣刀剣目録	1	昭和34年(1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会愛媛県支部発行。会場は松山市道後寿苑、宝荘。「龍泉貞次之部」で十二振り出品している。	
237	典籍・記録類	出品目録類	第八回全国大会本部出陣刀剣小道具目録	1	昭和34年(1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会愛媛県支部発行。会場は松山市道後寿苑、宝荘。高橋貞次出品目録と双龍文様の切り抜きがはさまれている。	
238	典籍・記録類	出品目録類	財団法人日本美術刀剣保存協会第八回全国大会記録	1	昭和34年(1959)	財団法人日本美術刀剣保存協会愛媛県支部発行。5月14～16日に松山市で開催。貞次は接待係員となる。	
239	典籍・記録類	出品目録類	文化財保護法施行十周年記念日本伝統工芸秀作展	1	昭和35年(1960)	主催文化財保護委員会・石川県美術館、会場石川県美術館。	
240	典籍・記録類	出品目録類	日本伝統工芸秀作展出品目録	1	昭和35年(1960)	石川県美術館第1・2展示室の金工で日本刀が出品されている。	
241	典籍・記録類	出品目録類	人間国宝刀匠二人展出品目録	1	昭和39年(1961)	主催財団法人日本美術刀剣保存協会大阪支部、後援サンケイ新聞社。会場大阪松坂屋。人間国宝の高橋貞次と宮入昭平の二人展。貞次は十七振り出品している。	
242	典籍・記録類	出品目録類	現代名刀五人展	1	昭和41年(1966)	毎日新聞・日本美術刀剣保存協会主催で東京上野の松阪屋で開催。太刀「剣巻龍裏正観音梵字彫昭和四十年」、短刀「粟田口伝八寸五分五つ龍護摩箸彫 昭和四十一年」を出品。	写真②
243	典籍・記録類	出品目録類	日本刀の彫刻展の案内ハガキ	1	昭和42年(1967)	アベノ近鉄5階画廊で開催。	
244	典籍・記録類	出品目録類	第十回人間国宝新作展	1	昭和49年(1964)	展覧会図録。主催毎日新聞社、後援文化庁・重要無形文化財保持者会。会場は東京上野松坂屋、名古屋松坂屋、静岡松坂屋、大阪大丸、「脇差 龍泉高橋貞次彫同作(花押) 昭和三十五年二月日」を出品。巻末に月山貞一の住所印がある紙片あり。	
245	典籍・記録類	出品目録類	人間国宝新作展	1		展覧会図録。主催毎日新聞社、後援文化財保護委員会・重要無形文化財保持者会。会場は東京上野松坂屋、名古屋松坂屋、大阪大丸、静岡松坂屋。「短刀 皇孫礼宮様御守刀彫打 昭和四十年七月吉日粟田口伝八寸五分直刀」、「短刀 皇孫御守刀以余鉄 昭和四十一年正月吉日七寸五分」、「龍泉高橋貞次六十二歳彫同作」を出品。	
246	典籍・記録類	出品目録類	展示作品キャプション	14		各展覧会における出品作品の展示キャプション。「国宝名物庵丁正宗写相州伝」、「皇孫殿下御守刀以余鉄之作」などのキャプションがある。	
247	典籍・記録類	その他	不明	1	慶応元年刊(1865)	板本。	
248	典籍・記録類	その他	東京日光鎌倉ノ景	1	明治21年刊(1888)		
249	典籍・記録類	その他	EHIME JAPAN	1	昭和29年(1954)	愛媛県商工観光課発行の広報誌。無形文化財刀匠として写真掲載される。	
250	典籍・記録類	その他	愛媛県文化財関係法規集	1	昭和29年(1954)		
251	典籍・記録類	その他	週刊読売 9月26日号	1	昭和29年(1954)	人間文化財(4)「少年時代の夢実る」掲載。	
252	典籍・記録類	その他	重要無形文化財等一覧	1	昭和30年(1955)	重要無形文化財及び保持者の一覧で、高橋貞次は工芸技術の部の日本刀で認定されている。	
253	典籍・記録類	その他	やきものの町-瀬戸- 岩波写真文庫165	1	昭和30年(1955)		
254	典籍・記録類	その他	官報 昭和30年5月12日第8505号	1	昭和30年(1955)	文化財保護委員会告示第二十七号に高橋貞次らが重要無形文化財保持者として認定されている。	
255	典籍・記録類	その他	第二次重要無形文化財保持者認定書交付式実施要項	1	昭和30年(1955)	5月12日に行われた第二次重要無形文化財保持者認定書の交付式と記念晩餐会の実施要項。	
256	典籍・記録類	その他	重要無形文化財指定保持者認定一覧	1	昭和30年(1955)	昭和30年5月12日現在の保持者認定一覧。	
257	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会より高橋貞次への入会依頼	1	昭和30年(1955)		



人間国宝・高橋貞次の鍛錬場の資料について

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
258	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会・定款・事業内容	1	昭和30年(1955)		
259	典籍・記録類	その他	えひめの文化財	1	昭和30年(1955)		
260	典籍・記録類	その他	刀剣美術工芸社月報 第1・2号	1	昭和30年(1955)	刀剣美術工芸社発行。	
261	典籍・記録類	その他	日本カメラ 9月号	1	昭和31年(1956)	「ボンカメ・グラフィック15 道後3題」で刀匠として紹介される。	
262	典籍・記録類	その他	日本工芸会報 3	1	昭和31年(1956)		
263	典籍・記録類	その他	日本工芸会報 4	1	昭和31年(1956)		
264	典籍・記録類	その他	日本工芸会報 5	1	昭和31年(1956)		
265	典籍・記録類	その他	社団法人 日本工芸会正会員名簿	1	昭和31年(1956)	昭和31年7月10日現在の五十音順名簿。第四部会(金工)に貞次の名前がある。	
266	典籍・記録類	その他	重要無形文化財等一覧	1	昭和31年(1956)		
267	典籍・記録類	その他	空から見た観光産業の都大松山市の実態	1	昭和32年(1957)	絵図。観光地図革命版。	
268	典籍・記録類	その他	鉄と生活 岩波写真文庫218	2	昭和32年(1957)	日本刀の項目で、貞次の制作工程が紹介されている。	
269	典籍・記録類	その他	たのしい生活 1	1	昭和32年(1957)	日本生命保険相互会社発行。	
270	典籍・記録類	その他	たのしい生活 2	1	昭和32年(1957)	日本生命保険相互会社発行。	
271	典籍・記録類	その他	「国家指定芸能特別鑑賞会」のパンフレット	1	昭和32年(1957)		
272	典籍・記録類	その他	重要無形文化財高橋貞次技術保存対策委員会関係書類	2	昭和32年(1957)	重要無形文化財高橋貞次技術保存対策委員会の依頼文、趣意書、設置要項、規約など。	
273	典籍・記録類	その他	いとし子らに贈る	1	昭和33年(1958)	著者冊文字の謹呈本。	
274	典籍・記録類	その他	南蛮美術	1	昭和33年(1958)	西村貞者。講談社。	
275	典籍・記録類	その他	たのしい生活 3	1	昭和33年(1958)	日本生命保険相互会社発行。	
276	典籍・記録類	その他	たのしい生活 4	1		日本生命保険相互会社発行。	
277	典籍・記録類	その他	たのしい生活 5	1		日本生命保険相互会社発行。	
278	典籍・記録類	その他	たのしい生活 6	1		日本生命保険相互会社発行。	
279	典籍・記録類	その他	たのしい生活 7	1		日本生命保険相互会社発行。	
280	典籍・記録類	その他	たのしい生活 8	1		日本生命保険相互会社発行。	
281	典籍・記録類	その他	日本美術 6	1	昭和33年(1958)	日本美術社発行。	
282	典籍・記録類	その他	日本美術 7	1	昭和33年(1958)	日本美術社発行。	
283	典籍・記録類	その他	週刊時事 1月21日号	2	昭和34年(1959)	「日本刀を鍛える－高橋貞次氏」掲載。	
284	典籍・記録類	その他	正阿弥勝義	1	昭和34年(1959)	著者渡辺知水の謹呈本。	
285	典籍・記録類	その他	源清磨墓地改修建碑記念号	1	昭和34年(1959)		
286	典籍・記録類	その他	たのしい生活 9	1		日本生命保険相互会社発行。	
287	典籍・記録類	その他	たのしい生活 10	1	昭和34年(1959)	日本生命保険相互会社発行。	
288	典籍・記録類	その他	たのしい生活 11	1		日本生命保険相互会社発行。	
289	典籍・記録類	その他	国宝武器の概説	1	昭和34年(1959)	大山祇神社・財団法人日本美術刀剣保存協会愛媛県支部発行。	
290	典籍・記録類	その他	感謝状	1	昭和35年(1960)	短刀銘梵字を愛媛県郷土芸術館に出品した際の愛媛県知事久松定武からの感謝状。	
291	典籍・記録類	その他	たのしい生活 12	1	昭和35年(1960)	日本生命保険相互会社発行。	
292	典籍・記録類	その他	たのしい生活 13	1		日本生命保険相互会社発行。	
293	典籍・記録類	その他	文化財保護委員会編「国宝事典」の案内パンフレット	1	昭和35年(1960)	便利堂発行。	

整理番号	大分類	小分類	資料名	点数	年代	備考	図版
294	典籍・記録類	その他	かがりび 83	1	昭和36年 (1961)	愛媛県警察発行「刀に生きる一人間国宝高橋刀匠物語」掲載。	
295	典籍・記録類	その他	たのしい生活 14	1	昭和36年 (1961)	日本生命保険相互会社発行。	
296	典籍・記録類	その他	たのしい生活 15	1	昭和36年 (1961)	日本生命保険相互会社発行。	
297	典籍・記録類	その他	たのしい生活 16	1	昭和36年 (1961)	日本生命保険相互会社発行。	
298	典籍・記録類	その他	財団法人日本美術刀剣保存協会 愛媛県支部新役員決定の通知	1	昭和37年 (1962)	貞次は顧問。	
299	典籍・記録類	その他	レントゲン写真	1	昭和37年 (1962)	貞次の腎臓血石のレントゲン写真。	
300	典籍・記録類	その他	月刊朝日ソノラマ 9月号	2	昭和38年 (1963)	ソノシートに「青い目の刀鍛冶 高橋刀匠とオースチンさん」収録。	
301	典籍・記録類	その他	日本刀の原料としての玉鋼及び 和銃について	1	昭和38年 (1963)	裏表紙に銘文案を記す。	
302	典籍・記録類	その他	第十三回愛媛新聞賞状	1	昭和40年 (1965)	額表。人間国宝としての功績を称える。	
303	典籍・記録類	その他	監修本間順治・佐藤貫一「日本刀全 集全8巻」の案内パンフレット	1	昭和41年 (1966)	徳間書店発行。第7巻「日本刀のできるまで」に 「刀身の彫刻 高橋貞次」が紹介されている。	
304	典籍・記録類	その他	徳間書店より高橋貞次への手紙	1	昭和41年 (1966)	監修本間順治・佐藤貫一「日本刀全集全8巻」の案 内パンフレットに付された手紙。出版協力への御 礼が記されている。	
305	典籍・記録類	その他	重要無形文化財等一覧	3	昭和42年 (1967)	重要無形文化財保持者会発行。	
306	典籍・記録類	その他	本阿弥光山原著・本阿弥光博解説「光 山押形 乾坤(全二冊)」の内容見本	1	昭和42年 (1967)	雄山閣発行。	
307	典籍・記録類	その他	【加納夏雄名品集】の案内パンフレット	1	昭和47年 (1972)	雄山閣発行。	
308	典籍・記録類	その他	【刀装小道具講座】の案内パンフレット	1	昭和47年 (1972)	雄山閣発行。	
309	典籍・記録類	その他	重要無形文化財保持者連絡会 (仮称) 会則案	1			
310	典籍・記録類	その他	松山銘菓「龍泉」の由来	1		柳桜堂の菓子紹介。	
311	典籍・記録類	その他	志羅遍之友	1		尺八手引、尺八俗曲集ほか。	
312	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会正会員認定基準	1			
313	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会 第一次正 会員(交渉中)名簿	1		第四部会金工に貞次の名前が記載されている。	
314	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会 役員名簿	1			
315	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会 特別会員候補、 顧問及び評議員候補(交渉中)名簿	1			
316	典籍・記録類	その他	社団法人日本工芸会の発会式の案内	1			
317	典籍・記録類	その他	大山祇神社「国宝甲冑展」目録	1		主催愛媛新聞社・大山祇神社・愛媛県・愛媛県教 育委員会、後援文化財保護委員会・国立博物館。 会場松山三越。	
318	典籍・記録類	その他	【日本の名槍】の案内パンフレット	1		人物往来社発行。	
319	典籍・記録類	その他	重要無形文化財高橋貞次技術保 存対策委員会名簿	1			
320	典籍・記録類	その他	【国宝絵巻】の案内パンフレット	1		便利堂発行。	
321	典籍・記録類	その他	財団法人日本美術刀剣保存協会 関係書類	4		会員証、領収証など。	